

東洋學報

第參拾六卷第四號

昭和二十九年三月

論 說

渤海國地理考

和田 清

一

西紀八九世紀の頃、今の滿洲の地に榮えた渤海國は、當時の唐朝からは「海東の盛國」と稱へられ、我が日本にも通貢してゐたので、頗る我が國人の注意を惹いた。されば、それに關する研究は甚だ多く、やや古い「大日本史」の渤海傳や「古事類苑」の外交部、外務省の「外交志稿」等は姑く措いても、その後には表はれた松井浪八氏・吉田東伍博士・松井等氏・津田左右吉博士・池内宏博士もしくは鳥山喜一氏・原田淑人博士・沼田頼輔博士・鳥居龍藏博士・稻葉岩吉博士・日野開三郎氏等の諸論考は殆ど無數といつてよい。中でも、鳥山氏は渤海史の専攻家といふべく、渤海史に關する文獻の蒐集整理や實地踏査に全力を傾注された。また原田博士等の「東京城」は渤海の上京龍泉府の精緻なる發掘報告で、渤海史研究上の金字塔である。

なほ外人の側にも近時この種の研究は頗る振ひ、朝鮮の徐相雨の「渤海疆域考」、柳得恭の「渤海考」、洪奭周の「渤海世家」等はやく古いが、清末の唐晏に「渤海國志」四卷、黃維翰に「渤海國記」三卷があり、民國の金毓紱氏には「渤海國志長編」二〇卷補遺一卷附錄二卷等がある。その他、舊時の「滿洲源流考」や近時の「吉林通志」・「寧安縣志」等にもこれに關説した精説が多い。ロシアのグレベンシチコフ氏やポノソフ氏などにも多少の考説がある。その中、金氏の「長編」こそあらゆる諸資料を博搜してこれを集大成したもので、眞に渤海史研究資料の總匯である。根本史料や參考資料についても、本書を一見すれば、殆ど凡べて明瞭である。ただその地名の比定は必ずしも正確ではない。

さういふわけで、渤海史の研究については既にその餘地がないやうであるが、なほ一考して見ると、必ずしもさうではない。かういふ風に後の研究が多いのは、一には基礎の史料が不足で、不明の箇所が多いからで、解釋の諸説は紛々として歸一するところを知らず、更に新解釋を要するやうである。私は渤海の歴史には寧ろ門外漢であつたが、今度、機會を得て唐書の渤海傳を讀む中、これらの研究に導かれて、思ひついたところがあるので、特にその地理について聊か新説を開陳したと思ふ。

二

渤海は誠に滿洲に起つた隨一の文明國で、唐の則天武后の聖曆元年即ち我が朝の文武天皇即位の二年(683)に起り、唐亡んで後、五代後唐の明宗の天成元年即ち我が朝の醍醐天皇の延長四年(936)に亡ぶるに至るまで、十五代二百二十九年の間繁盛を續けたのであるが、随つてこの大唐の文化を承けた大國には相當の文化もあり、それ相應の記録も文書もあつた筈であるが、末年に西隣契丹の蹂躪を受け、亡んで後久しくなつた今日では、この國人親らの手に成つた記録は何一つ遺つてゐ

ない。唐や日本と交通したことや、殊に日本に來た使人が我が文人と應酬した詩文等が多少傳へられてゐるだけである。されば、今日この國の往事を知るためには、主として新舊唐書の渤海傳と、引き續いてその末路を傳へた五代史・宋史の渤海傳等を見る外はない。

その中、新舊兩唐書の史料價値については、古來色々の批判があるが、少くとも渤海傳に關する限り、舊唐書の價値は新唐書のそれよりも遙に低いやうである。舊唐書渤海傳の記事は誠によく冊府元龜の所傳と一致してゐるけれども、概して言へば、それは唐朝との交渉の一面に限り、その他の事は殆ど何物も傳へてゐない。之に反して新唐書渤海傳には、舊唐書にはなくて、新唐書にのみあるやうな記載が極めて多い。さうしてそれは大抵渤海國內の内情に關することのみである。例へば、渤海内部に行はれた歷代國王の諡號や年號や、何王の時どの地方が經略されたとか、もしくは國內の行政區劃・官制や地方の名産のこと等がこれである。これによつて始めて我々は渤海の國情の大略を察知することが出来る。

それでは、どうして渤海の亡後間もなく出來た舊唐書にはこれらの記載がなくて、更に數十年後に成つた新唐書の著者はこれらの事を知り得たのであらうか。それは明かに唐末の遣渤海使張建章の手記「渤海國記」三卷を利用し得たからである。その事は既に金毓紱氏もほど推測してゐられる。

張建章の「渤海國記三卷」のことは、舊唐書の經籍志には見えないけれども、新唐書^{卷五}藝文志地理類の末に近く見え、更に後の宋史^{卷二}藝文志にも、崇文總目^{卷二}にも、明の焦竑の國史經籍志^{卷三}にも、見えてゐる。新唐書の編者がこれを利用したことに疑ひはない。張建章のことは私は未だ詳にしないが、宋史^{卷二}四九の王溥傳によると、この唐會要や五代會要の著者は藏書に富んでゐたので、その子の貽孫がこれを讀んでまた博識で、宋の太祖が禮を問うた時、見事にこれに應へたので、宰相の趙普がその故を尋ねたら、「太和中、有幽州從事張建章、著渤海國記、備言其事」といつたとあり、同様のことは王偁の

東都事略^{卷一}にも王應麟の玉海^{卷一}にも見えてゐる。だから渤海國記には渤海の禮制なども書いてあつたのであらう。とも角、張建章が渤海に使したのは唐の文宗の太和年間のことと確かで、金毓紱氏はその長編^{卷七}の大事表に、太和九年(835)の條に繋けて、「幽州節度行軍司馬張建章來聘」と記し、叢考の中にもその事を斷つてゐる。太和九年は渤海中興の英主宣王大仁秀の次代の王大彝震の咸和五年に當る。翻つて新唐書の渤海傳を見ると、初代の高王大祚榮にはまだ諡號だけで、年號はないが、第二代の武王大武藝以來は歷代悉く諡號と年號とを併せて傳へてゐるのに、それは第十代宣王大仁秀に至つて窮まり、第十一代大彝震には年號だけで、諡號はなく、第十二代大虔晃以後は諡號も年號も俱に傳はらなくなつてゐる。これはどういふわけかといふと、言ふまでもなく、彝震王の時代に行つた張建章がその事を傳へたからで、前代までの諡號年號は既に定まつてゐたから解つたが、彝震王はまだ在世中で年號はあつたが、追諡は勿論まだなかつたのである。さうしてその後の事は渤海國記に缺けてゐるので、新唐書の記述は簡略を極め、たゞ他書によつて、次代次々代の王虔晃及び玄錫の名だけを補ひ、遂に「後朝貢至否、史家失傳、故叛附無考焉」と結んでゐるのである。⁽⁴⁾

かう考へて見ると、新唐書渤海傳の記事の舊唐書と違ふ部分は、殆ど全く張建章の渤海國記に據つたのであつて、しかも張建章は直接これを當時の見聞によつて獲て來たのであるから、それは必ず渤海側の所傳と見るべく、中には渤海の記録をそのまゝ寫したのもあること後に説く如くで、相當に尊重せられなければならぬ性質のものである。

三

以上やや永々と新舊唐書の渤海傳の比較を論じたが、これを考定して置かないと、兩唐書の記事を批判する場合に評價の誤を生ずるからである。以下私は専ら新唐書渤海傳の地理の問題を論ずる積りであるが、その前に少しく蛇足を加へて置か

先づ第一に渤海國祖の出身の問題であるが、舊唐書渤海傳には、「渤海靺鞨大祚榮者、本高麗別種也」とあるに對して、新唐書の渤海傳には、「渤海本粟末靺鞨附高麗者、姓大氏」とあり、一見矛盾してゐる。渤海が高句麗の餘類を以つて唐初の擾亂に乗じて起つたことは疑問のないことで、だからその日本に朝貢するや、自ら「高麗の舊居を復し、扶餘の遺俗を有つ」といひ、自らも高麗國王と稱し、我が國でもこれ待つに高麗國王を以つてしたのである。なほ渤海人が自ら靺鞨人と區別してゐたことは後に説く通りである。舊唐書の編者がこれを「本高麗別種也」といつたのは正しくこの意味であらう。しかし高麗の別種といつてその同類とはいはなかつた。この時高麗の遺族は遼東の安東都護の管下にあつて、遼西の朝陽（營州）に居つたのは寧ろ靺鞨の餘類であつた。さうして渤海の國祖はその遼西の朝陽から起つたのである。さうして見れば、新唐書に明白に「本粟末靺鞨附高麗者」とあるのがやはり正しいのではないか。況して新唐書の所傳は渤海側自身の消息を傳へてゐると思はれるにおいてをやである。尤もこの場合には兩唐書の所傳は必ずしも矛盾ではない。「本粟末靺鞨附高麗者」が即ち「本高麗別種也」と解釋出来るからである。

なほこれと聯關して起る問題は、渤海建國の始末である。舊唐書渤海傳には前條に續けて直に

高麗既滅、祚榮率家屬、徙居營州。萬歲通天年、契丹李盡忠反叛。祚榮與靺鞨乞四比羽、各領亡命、東奔保阻、以自固。盡忠既死、則天命右玉鈴衛大將軍李楷固、率兵討其餘黨、先破斬乞四比羽。又度天門嶺、以迫祚榮。祚榮合高麗・靺鞨之衆、以拒楷固。王師大敗、楷固脫身而還。屬契丹及奚、盡降突厥。道路阻絕、則天不能討。祚榮遂率其衆、東保桂婁之故地、據東牟山、築城以居之。

とあり、頗る簡明であるが、之に反して、新唐書の叙述は事實を前後し、混雜して要領を得難い。尤もその混雜は必ずしも

渤海國記に關係なく、新唐書の編者が舊唐書その他の史料を雜糅して文を爲したものであるから、別して問題ではない。問題になるのは、舊唐書が大祚榮一人を出したのに反して、新唐書は更に舍利乞乞仲象なる者を點出して、關係を複雑にしたことである。新唐書の渤海傳にはその事を説いて曰く、

萬歲通天中、契丹盡忠殺營州都督趙懿反。有舍利乞乞仲象者、與靺鞨酋乞乞四比羽及高麗餘種、東走遼東、保太白山之東北、阻奥婁河、樹壁自固。武后封乞乞四比羽爲許國公、乞乞仲象爲震國公、赦其罪。比羽不受命。后詔王鈐衛大將軍李楷固・中郎將索仇擊斬之。是時仲象已死、其子祚榮引殘衆遁去。楷固窮蹙、度天門嶺。祚榮因高麗靺鞨兵、拒楷固、楷固敗還。於是、契丹附突厥、王師道絕、不克討。祚榮即并比羽之衆、恃荒遠、乃建國、自號震國王、遣使交突厥。

これは兩渤海傳の根本的矛盾である。池内博士は嘗てこの問題を考へて、「渤海の建國者について」なる一篇を著し、⁷⁾「も」し乞乞仲象が渤海の開國者ならば、必ず後世に廟祀さるべきである。然るに、渤海の國祖は高王大祚榮であつて、乞乞仲象は與らない。大祚榮は漢名であるに對して、乞乞仲象は夷名であるから、兩者は必ず同一人の異名であらう。これを親と子の如くに記したのは、その矛盾を説明せんための窮策でなければならぬ」といふやうに結論された。誠に妙案ではあるが、果してどうであらうか。

池内博士は右の渤海傳の「是時仲象已死、其子祚榮引殘衆遁去」の一句は新唐書の編者の捏作だとせられたが、新唐書より前に、既に王溥の五代會要^{卷三}にも、「有高麗別種大舍利乞乞仲象^{大姓、舍利官、乞乞仲象名也}、與靺鞨酋長乞乞四比羽、走保遼東、分王高麗故地。武后封乞乞四比羽爲許國公、大舍利乞乞仲象爲震國公。乞乞四比羽不受命。武后命將軍李楷固擊殺之。乞乞仲象死、其子大祚榮繼立、并有比羽之衆」とあれば、これは新唐書の發明ではない。王溥は前述の如く張建章の渤海國記を所藏してゐたものであるから、そのこれを利用したことは疑ひなく、この舊唐書に見えない新唐書の記事は、必ずや渤海側の所傳を語

るものであらう。もし果してさうとすれば、渤海自らが傳へる大舍利乞々仲象の子大祚榮といふものは、やはり事實でなければならぬ。さうして乞四比羽は許國公、乞々仲象は震國公に封ぜられたとすれば、當時の他の例から見ても、相當の大酋として重んぜられてゐたことが想像せられる。

思ふに、高句麗の亡びたのは、唐の高宗の總章元年(668)であるから、その時營州即ち今の朝陽に徙された高句麗の餘類が武后の萬歲通天(696)の契丹の亂に乗じて逸走するまでには約三十年を隔てゐる。乞々仲象や乞四比羽が假りに壯年にしてここに徙されたとしても、逸走の時には既に相當の老年でなければならぬ。さうした老人が崎嶇とした險阻を越えて奔走したから、中道にして斃死したのであらう。その子の祚榮はその時青壯であつたとしても、獨立して約二十年にして唐の開元七年(719)に歿した時にはやはり老年であつたのであらう。祚榮の子武藝は在位約二十年であつたが、その子欽茂は在位六十年に近かつた。かういふところから逆算して見ても、祚榮が獨立の當時既に頽齡の老人だつたとは考へられず、その點からも、これを乞々仲象と同一人と考へることは困難である。私はかういふ見地から、池内博士の論證は折角の妙案ながら俄に従ひ難いと思ふ。

次ぎに問題は營州を遁け出した乞々仲象や乞四比羽は最初にどの方面に據つたかといふことである。これは十分證據のないことであるから、何とでも臆説が立てられるが、姑く尤もらしい假説を考へて見よう。固より舊唐書にいふ「東保婁婁之故地、據東牟山、築城以居之」とあることや、新唐書に或は「保太白山之東北、阻奥婁河、樹壁自固」といひ、或は「率衆保挹婁之東牟山、地直營州東二千里」と見えるのは、舊唐書にも他の所に「其地在營州之東二千里」とあるのと同じことで、渤海建國の本據を指し、後にいふ渤海の中京顯德府の地、今の東間島の西偏、西古城子の地に外ならぬから、その奥婁河は恐らく今の海蘭(Hailan)河で、東牟山は今の老嶺山脈中の北飢山にでも當るであらう。これは勿論問題は別である。

その前の天門嶺は資治通鑑^{一〇二}の胡三省注には新唐書の地理志（實は安祿山傳）を引いて、「天門嶺在土護眞河北三百里」とあるが、土護眞河は今の熱河の老哈河であるから、高句麗の餘類がその本據に通けるのに、かやうな方面に出でる筈はない。これは同名の異地であらう。やはり新唐書の渤海傳にある通り、東走して遼水を渡つたものに相違ない。但し當時はまだ遼東の新城即ち今の撫順の地に安東都護府があつた筈であるから、⁸叛衆は更にこの地を越えて東方の山地に走つたのであらう。これより東方の要地では先づ鴨綠江畔の輯安盆地がある。ここは高句麗發祥の本土であり、後には丸都城及び國內城があり、唐初の高句麗剿滅の役にも、ここだけは兵燹を被らなかつた要害である。⁹ここなら恐らく古の桂婁部の地で、舊唐書に所謂「桂婁之故地」にも當り、後に渤海國王の世子が代々桂婁郡王に封ぜられた故事にも合致する。高麗の餘類が先づ遁け込むにはここそと思はれる。しかしここへ入るには、新城の安東都護府は頗る途中の妨けになる。それよりも、もし渤海の國祖が初めここに據り、それから前に言つた中京顯德府の地に移つたのだとすると、それは全く忽汗河即ち今の牡丹江とは縁故がなくなる。渤海が獨立すると、唐は直にこれを忽汗州都督に封じたのだから、唐は最初に渤海に入るのに忽汗河畔を過ぎたものでなければならぬ。それには最初の根據が輯安盆地では都合が悪い。これが私が輯安盆地を最初の遁入地に擬し得ない所以である。

それでは乞々仲象・乞四比羽の最初の根據地は果してどこであつたらうか。私はやはり粟末靺鞨の本地、今の吉林の方面ではなかつたらうかと考へる。乞々仲象が粟末靺鞨の高麗に附するものであつたかどうかは俄に斷じ得ないにしても、少くとも乞四比羽はその靺鞨である。彼等はやはりその出身の地へ遁け還つたのであらう。五代會要によると、彼等は「走保遼東、分王高麗故地」、そこで武后は「封乞四比羽爲許國公、大舍利乞々仲象爲震國公」とある。或は彼等は互に分地を持ち、多少離れたところにゐたのではあるまいか。さてこそ唐軍に襲はれた時、乞四比羽は陣歿し、乞々仲象の子は遁れ得たので

はあるまいか。もしさうとすれば、所謂天門嶺は吉林東方の分水嶺にでも當るであらう。さうして大祚榮はここに敵を敗つて、忽汗河の流域から中京顯德府の地へ遁入したのであらう。しかし勿論これは確據なき憶測である。次ぎに私は本論に入り、やや根柢ある議論に移らなければならぬ。

四

新唐書の渤海傳には、渤海の建國に續いて、第二代の武王大武藝が大土宇を東北に斥いたので、諸夷が畏れて臣事したと、第三代文王大欽茂の永き治世の間に、唐の天寶の末に都を舊國から三百里に直る忽汗河東の上京に徙し、貞元の時また東南して東京に徙つたこと、文王の孫成王華嶼の代に再び上京に還つたこと、更に第十代宣王大仁秀が頗る討伐を能くし、海北諸部を平けて大境宇を開いたことなどを述べた末に、「至是遂爲海東盛國」といひ、その行政區劃を述べて左の如くある。以下論證せんとするのは即ちこの一節である。

地有五京十五府六十二州。以肅慎故地爲上京、曰龍泉府、領龍・湖・渤三州。其南爲中京、曰顯德府、領盧・顯・鐵・湯・榮・興六州。獮貊故地爲東京、曰龍原府、亦曰柵城府、領慶・鹽・穆・賀四州。沃沮故地爲南京、曰南海府、領沃・晴・椒三州。高麗故地爲西京、曰鴨渚府、領神・桓・豐・正四州。曰長嶺府、領珣・河二州。扶餘故地爲扶餘府、常屯勁兵扞契丹、領扶・仙二州。鄭誦府領鄭・高二州。挹婁故地爲定理府、領定・潘二州。安遠府領安・瓊二州。率賓故地爲率賓府、領華・益・建三州。拂涅故地爲東平府、領伊・蒙・沱・黑・比五州。鐵利故地爲鐵利府、領廣・汾・蒲・海・義・歸六州。越喜故地爲懷遠府、領達・越・懷・紀・富・美・福・邪・芝九州。安遠府領寧・郿・慕・常四州。又郢・銅・涑三州爲獨奏州。涑州以其近涑沫江、蓋所謂粟沫水也。龍原東南瀕海、日本道也。南海新羅道也。鴨渚朝貢道也。

扶餘契丹道也。

これは舊唐書には全く見えないところであるから、その叙述の態といひ、必ずや張建章が渤海の文獻から寫し取つたものに相違ない。なほ契丹の渤海を滅ぼすや、これらの府州縣を悉く西に徙してその直轄領内に入れたが、遼史^{卷三七}の地理志には大抵一々渤海の故縣名を舉げてゐるから、これを綜合することによつて、渤海舊時の府州の屬縣名を大體想定することが出来る。現に金毓紱氏は長編^{卷一}の地理考に於いてその考定を試みてゐる。思ふに、新唐書の編者は煩を厭うてこれを省いたが、渤海國記の原文にはこれらの縣名もあつたのかも知れない。少くとも遼史の編者はさういふ資料を持つてゐたのである。勿論遼代に移置後の府州縣は渤海の舊とは位置が違ふが、それでもこれは上掲の渤海傳の本文と併せて考へると多少の参考にはなる。

さて渤海の五京十五府六十二州の位置であるが、數十年前までは全く忘れ果てられて殆ど何物も解らなかつた。それが明治の末年に白鳥庫吉博士の實地踏査を経て、始めて金の上京會寧府が今の哈爾濱の東南阿城縣の白城子であり、渤海の上京龍泉府が寧古塔の西南、牡丹河東の東京城であることが確認せられた。それまでは兩者は混同せられて頗る判明を缺いてゐたのである。ついで昭和年間の發掘調査となり、原田博士等の調査報告「東京城」が出るに至つて、その唐都長安城に倣つた規模構造まで明かにせられた。別にここが龍泉府だといふ記録は出なかつたけれども、かくして牡丹河東の東京城が忽汗河東の上京龍泉府の故址なることには今日毫末の疑もない。

次ぎに中京顯德府であるが、こは渤海國王の舊都であり、その方位や距離は、後にいふ唐の賈耽の道里記にほど見ゆるところであるから、清の曹廷杰はこれを今の輝發河と松花江との合流點に近き那丹佛勒(Nadan Foro)附近と考へ、その説を東三省輿地圖說に著し、後の吉林通志も我が滿洲歴史地理も之に従つた。その後熱心に實地踏査をされた鳥山氏は、那

丹佛勒（官衙）の城址は餘りに小規模であるからとて、これを更に西南方に徙し、今の蘇密城こそ是れであらうと考へられ、⁽¹⁰⁾金毓紱氏は今でもそれに従つて、蘇密城は中京顯德府でないまでも、所謂渤海の舊國に相違ないと信じてゐる。⁽¹¹⁾しかし所謂舊國と中京とを別地と考へるのは果して如何であらうか。私共は津田左右吉博士が中京は恐らく今の敦化附近だらうといふ新説を發表されるに及んで、俄にそれに傾いた。それといふのは、唐の記載による限り、唐は渤海の獨立と同時に、その地に忽汗州を置き、その王を忽汗州の都督に任じたことは確かであるからである。言ふまでもなく、忽汗州の名は忽汗河から出て、その忽汗河とは呼爾喀（Hukha）河即ち今の牡丹江の別名に外ならないのに、敦化を流れる勒福成河は牡丹江の上流に當る。西方から來た唐人が近い松花江の支流輝發河の流域に據つた土人に名を與へるのに、分水嶺を越えた先方の遠い忽汗河の名を以つてする筈はないと思つたからである。ところが研究は更に進み、東京城の調査の結果、その規模構造が判明するに及び、蘇密城や敦化城址は到底これに比較すべきものではなく、能くこれと對比出来るのは、東間島の西偏海蘭河畔の西古城子の外にないことが知られ、これこそ中京顯德府の遺蹟ではないかといふことをやはり鳥山氏が發表された。⁽¹²⁾最も意外な所ではあつたけれども、さういへばそれに違ひないことを私は確信した。その理由は後で一緒に述べる。

東京龍原府は上京の東南で、その東南は海に瀕し日本に通ずる道に當るといふのであるから、その方位は推定し易く、早く松井等氏がこれをこの方面の要地璦春附近に比定された。⁽¹³⁾尤もそれについても色々異論があつたが、戦時中この方面の遺蹟半拉城子⁽¹⁴⁾を發掘したものがあつて、その構造が東京城や西古城子に全く同じだといふので、龍原府の都址もここに決定された。南京南海府は沃沮の故地であり、新羅道であるから、それが朝鮮の咸鏡道方面であることは直ぐ解るが、さてその中のどの邊であらうか。或は鏡城といひ、城津といひ、北青といひ、色々の説があるが、もしその沃州の名が古の沃沮城と關係があるなら、やはり今の咸興の邊でよいのではなからうか。⁽¹⁵⁾この方面の渤海の南界は泥河といひ、今の德源の附近だらう

といふことであるが、後にいふやうに、東京龍原府の疆域が相當咸鏡北道の北邊に喰込んでるやうであるから、南海府の本據は大體この邊でよいのであらう。

次ぎには西京鴨渚府であるが、これについては、新唐書^{卷四}地理志の末に引いた有名な賈耽の道里記の中に

自鴨渚江口、舟行百餘里、乃小舫泝流東北三十里、至泊汭口、得渤海之境。又泝流五百里、至九都縣城、故高麗王都。

又東北泝流二百里、至神州。又陸行四百里、至顯州、天寶中王所都。又正北如東六百里、至渤海王城。

とあり、これだけでは解らないが、更に遼史^{卷三八}地理志東京道の條を見ると、

涿州鴨渚軍節度、本高麗故國、渤海號西京鴨渚府。城高三丈、廣輪二十里。都督神桓豐正四州事。故縣三、神鹿・神化

・劍門、皆廢。……

といひ、その統州のことを述べて、

桓州高麗中都城、故縣三、桓都・神郷、洪水、皆廢。高麗王於此勅立宮闕、國人謂之新國。……戶七百、隸涿州、在西

南二百里。

とあり、更に豐・正諸州のことを説いてゐる。これで見ると、遼代の涿州が渤海の神州で、そこが西京鴨渚府なのである。

鴨渚江口から舟行百餘里、乃ち小舫に換へて東北に溯ること三十里といふ泊汭口は、箭内互博士の考證で明かな通り、今の渾江の南の蒲石河口である。ここが當時の唐・渤海の境界だつたのであらう。それから更に流を溯ること五百里にして至る九都縣城とは丸都縣城の誤で、即ち遼史に見える桓都縣で、今の通溝盆地、輯安縣の地である。ここが高句麗の王都であつたことは、兩史料の記す通りで誤ない。さてここからまた東北に溯ること二百里にして達する神州は、更に陸行すること四百里にして顯州即ち渤海の舊都中京顯德府に至るべしといふ。その地はどうしても今の中江鎮の對岸、臨江縣の附近でなけ

ればならぬ。されば松井等氏がこれを臨江縣に比定して以來、疑ふものはなかつたが、その後踏査が進むと、臨江附近にはさやうな古城址はないからといふので、西京鴨綠府を以つて却つて通溝に當てる説が生じた。しかしこれは唐・遼の史料に俱に誤りやうもなく明記してあるのであるから、さう考へるのは無理であらう。も少し臨江の附近もしくはその下流方面でも手廣く探検すべきである。

長嶺府は渤海傳に「營州道也」とあり、賈耽の道里記には「營州東百八十里、至燕郡城、又經汝羅守捉、渡遼水、至安東都護府五百里、府故漢襄平城也、……自都護府東北、經古蓋牟・新城、又經渤海長嶺府千五百里、至渤海王城」とあるから、結局遼陽(襄平)から撫順(新城)を經、渾河を溯つて輝發河流域に出でる路上にあつた。今、渾河の上流英額河を溯つて、輝發河流域に出る坂路は誠に長き峠路である。滿洲源流考^{卷一}にはこれを指して、「今吉林西南五百里、有長嶺子、滿洲語稱果勒敏珠敦(Golmin Judun 卽ち長嶺の義)、云々」といひ、今の英額門の邊をこれに擬し、松井等氏もそれに從はれた。²⁰しかしその邊にはこれと覺しき城蹟もないから、津田博士は峠を上り切つて輝發河畔に出で、その上流の北山城子²¹を以つてこれに擬て、遼が討伐した回跋城も恐らくこれで、兩者は同城の異名と考へられた。この邊には極めて城址が多いが、北山城子ほど交通の咽喉を扼した要害はないから、これが長嶺府なことはほぼ確かであらう。

最後に扶餘府であるが、扶餘府は遼の黃龍府である。遼は後にこれを東北に徙したが、金はそれを襲つて隆安府といひ、後に訛つて農安となつた。今、金時の塔の殘つてゐる農安が是れである。だから渤海の扶餘府はその西南に當つた筈である。私は嘗て金毓紱氏の暗示に従つて、これを昌圖の方面まで徙したが、それは聊か行き過ぎのやうである。池内博士が本來の夫餘を今の阿城の方面に擬せられることの不穩當なのは言ふまでもない。²²

以上が五京十五府の中、今日やゝ見當のつく凡べてである。その他にも勿論色々な説はあるが、到底信憑すべき限りでは

ない。といふのも、前掲の渤海傳の本文を誤讀してかゝつてゐるからである。しかし先學不屈の努力によつて、これだけでも明瞭になつてゐたればこそ、これを基礎として以下私の見解も立て得たのである。

五

さて渤海傳の記事の誤讀といふのは、從來は動もすれば、右の「以肅慎故地爲上京、曰龍泉府、領龍湖渤三州、其南爲中京、曰顯德府、領盧顯鐵湯榮興六州」の如き本文を解して、肅慎の故地は上京龍泉府に限り、其の南の中京顯德府は全く別地と考へたことである。これではその敘述の中に、何の故地でもないところが代る代る出て來て頗る變である。さうではなく、これは上京も中京も相連つた肅慎の故地なのである。同様にして高麗の故地は鴨渚府と長嶺府とを含み、扶餘の故地は扶餘府と鄭諤府とを含み、挹婁の故地には定理府と安邊府とがあり、越喜の故地には懷遠府と安遠府との二府があるものとして讀むべきである。白鳥博士は嘗てこの事を指摘され、金毓紱氏も勿論その意味で讀んでゐる。

尤もその某々の故地といふ某々のことは必ずしも正確ではない。例へば、肅慎といふのは漢人が最初に知つた滿洲部族の名で、周の成王の時來貢したとか、孔子が陳の惠公にその事を教へたとか、凡べて先秦の傳説に附會されたもので、漢人が實際滿洲の奥地を知つた時には既に肅慎はなく、三國志の東夷傳には挹婁のことを言つて、「卽古肅慎氏也」とあるくらいである。晉の時肅慎と呼ばれたのは實は挹婁に過ぎなく、司馬氏が篡奪の迹を飾らんとして、恣に名づけただけのものなることは、池内博士の論證された通りである。所詮肅慎はどこにゐたのだかも明かでないが、必ず楷矢石磐に伴つて古くから現はれるところを見ると、恐らくは滿洲の交通の要道である黑龍江松花江の流域からでも來て知られたものであらう。少くとも寧古塔や間島のやうな不便なところから來た筈はない。また東京龍泉府の地を濊貊の故地とあるけれども、今日私共の知

るところでは、この邊は沃沮殊に北沃沮の地であつて、濊貊は遙に南方、咸鏡道の南邊から江原道方面にかけてゐたものである。これはこれらの地方が早く高句麗に同化されて、その歴史が解らなくなつてゐたための誤解に相違ない。

池内博士はこの不合理を指摘して、「肅慎も挹婁も同一である。これを二ヶ所に分ち名づけるのは無意義である²⁴⁾」とて、この故地説を全部一蹴してしまはれたが、それでよいであらうか。池内博士はこれを新唐書の作者の捏作と想はれたから、さういはれたのであらうが、これは新唐書の發明ではなく、必ずや渤海人自身の所傳でなければならぬ。なる程、渤海人士の古代歴史地理に關する知識は今日の我々に及ばず、そのために誤謬を犯してゐるであらうけれども、少くも、その當代の歴史地理の説明は必ずしもさう荒唐ではあるまい。中にはこの時初めて史上に現はれて相當信憑すべきものもあるやうである。否、それよりも渤海の地理學者は、この故地の名を以つてその地方地方を區別してゐることは確かであつて、その指定された地域には、そこに舉げられた府州だけしかなく、同時に他の府州はその地域に入り込み得なかつたことに間違ひはない。この自明の理を念頭に置いて餘ろに考察を進むべきである。

六

最初に肅慎の故地であるが、ここには今の東京城の上京と西古城子の中京とを含んでゐるから、寧安（寧古塔）から和龍に至る地域を包含してゐたものであらう。その間には老爺嶺山脈が横たはつてゐるが、牡丹江の流域から旺清河（嘎呀河）の流域に出る老爺嶺の峠は極めて低いから、これを連屬して考へることは可能である。その中、上京龍泉府には龍湖渤三州が屬してゐたといふ。龍州は當然首州として東京城に治したのであらう。その下に永寧・豐水・扶羅・長平・富利・佐慕・肅慎・永平の八縣を領してゐた。永寧は附郭の縣であるから、これも東京城内にあつたので、我が續日本後紀卷一によると、

仁明天皇の嘉祥二年(830)に入朝した渤海國使は永寧縣丞王文矩といふ者であつたといふが、即ち國都の助役が入貢したわけである。嘉祥二年は渤海の彝震王の咸和十九年で、唐の宣宗の大中三年に當る。

前に引いた賈耽の道里記には、渤海王「城臨忽汗海、其西南三十里、有古肅慎城」とあり、金の時冷山即ち今の吉林の東北の舒蘭縣にゐた宋の洪皓の松漠紀聞には左の如く、

古肅慎城、四面約五里餘、遺堞尙在渤海國都三十里、亦以石累城脚。

と見え、契丹國志にもこの文を襲つてゐる。渤海の肅慎縣は恐らくここにあつたのであらう。而してこの故にこそ渤海人はこの地方を肅慎の故地と考へたのであらう。東京城の西南三十里といへば、今の鏡泊湖即ち忽汗海畔の北湖頭の邊でなければならぬ。その他の諸縣の位置は審かでないが、いづれこれらの旁近にその遺址を留めてゐるであらう。今、實地踏査の便なきを憾むのみである。

湖州・渤海の位置も審かでないが、湖州はその名稱から考へて、鏡泊湖の方面にあつたに相違ないから、同湖西の額穆か敦化の方面であらう。その領縣の名は明かでない。もしさうとすれば、地形の大勢から考へて、湖州は今の寧安の方面にもあつたのでなければならぬ。領縣は貢珍一縣だといふから、やはりその地にあつたのであらう。寧安附近には幾多の古城址があるやうだが、今、それを何とも比定しようもない。いづれにしても、かくして上京龍泉府の地は凡べて寧安以上の牡丹江即ち忽汗河の上流一帯にあつたのである。

中京顯德府は上京の南にあり、盧・顯・鐵・湯・榮・興の六州を領してゐたといふ。西古城子を中心としたこの地方は豆滿江の左岸、海蘭・布爾巴圖・嘎呀三河の流域一帯に互り、所謂東間島の地で、東滿隨一の沃土である。だからそこに六州もあつたのである。

顯州はその首州で、金徳・常樂・永豊・雞山・長寧の五縣を領したといふ。その縣治の位置は今知る由もないが、顯州と金徳縣とはやはり倚郭で、西古城子の地にあつたのであらう。盧州のことは、遼史^{卷三}の地理志に

盧州玄徳軍刺史。本渤海杉盧郡、故縣五、山陽・杉盧・漢陽・白巖・霜巖、皆廢。戶三百。在京東一百三十里。……

とある。その京東一百三十里といふのは渤海舊時のことを言つてゐるに相違ないし、渤海傳の後の條に盧城は稻の名産地とあるから、盧州は海蘭河の下流、龍井村の附近にでも當るであらう。鐵州は同様に京の西南六十里で、位城・河端・蒼山・龍珍の四縣を領してゐたといふ。その位城は鐵の名産地で、鐵州の名もそれから起つてゐるやうである。西古城子の西南は海蘭河の上源地で、朝鮮茂山の西北に當り、この地方は今日でも鐵鑛の産地を以つて知られてゐるから、鐵州は必ずこの地方であらう。湯州は京の西北一百里、靈峯・常豊・白石・均谷・嘉利五縣を領してゐたといふ。京の西北一百里なら、今の天寶山の麓のあたりであらう。榮州は遼史地理志に崇州に作る。崇山・瀉水・綠城三縣を領してゐたといふから、恐らくは崇州が正しいのであらう。京の東北一百五十里といふのから見ると、今の延吉の邊でなければならぬ。興州は京の西南三百里、盛吉・蒜山・鐵山三縣を領すといふ。西南三百里といふのが果して正しければ、これは分水嶺を越えた豆滿江の上流附近と思はれる。以上概して東方の平野に少く、西方の山地にのみ州縣が密集してゐるのは、少々變に思はれるけれども、或は西古城子を中心だつた頃には、かくの如く西方山地が開けてゐたのであらうか。

とも角、所謂肅慎の故地は上京・中京の畿内に當り、渤海王國の中心地帶であつた。されば、後段の特産の條にも、「顯州之布、龍州之紬、位城之鐵、盧城之稻、涓沱湖之鯽」などと、その繁榮を謳はれてゐる。顯州の布などは或は三國志東夷傳東沃沮の條に見えるこの地方の名産「貂布」の系統を引いてゐるものかも知れぬ。涓沱湖は即ち Bilen 湖で、今の鏡泊湖即ち忽汗海の異名なのである。上京と中京との關係については、渤海傳の本文にも、上京は「其南爲中京」といひ、或は

「天寶末、欽茂徙上京、直舊國三百里忽汗河之東」といひ、賈耽の道里記には、「顯州又正北如東六百里、至渤海王城」とあり、その方位は明白である。「正北如東」とは西古城子より嘎呀河の流域に出で東京城に如つたことを謂つたのであらう。たゞその六百里は過大で、渤海傳の三百里と甚だ齟齬するやうであるが、六は恐らく三の譌字なのであらう。唐の使節はこゝへ来るのに、太白山即ち白頭山の麓を過ぎて來たのであつて、その地は正しく新唐書に言ふやうに「太白山之東北」に當つたのである。その所謂奥婁河が海蘭河に當り、東牟山が老嶺山脈中の北饒山なるべきことは前に述べた。いづれにしても、これらは皆肅慎の故地として同一地方にあつたのであつて、方位の違つた狭い瘠地の敦化方面や、境を隔てた輝發河の流域などにあるべき筈はない。輝發河の流域は別區劃の高麗の故地、長嶺府の管域だつたのである。これが私をして西古城子こそは中京顯德府の地と確信せしめた主な理由である。

七

次ぎに東京龍原府であるが、それは新唐書の渤海傳に

東京龍原府一曰柵城府、濊貊故地也、領慶・鹽・穆・賀四州。
とあり、遼史^{卷三}地理志東京道の條には

開州鎮國軍節度、本濊貊地、高麗爲慶州、渤海爲東京龍原府、有宮殿、都督慶鹽穆賀四州事。故縣六、曰龍原・永安・島山・壁谷・熊山・白楊、皆廢。疊石爲城、周圍二十里、……

とある。その濊貊の故地が實は北沃沮の故地なるべきことは前に言つた。柵城府については、別に三國史記^{卷三}地理志に引いた賈耽の古今郡國志に、

渤海國南海・鴨渚・扶餘・柵城四府、並是高句麗舊地也。自新羅井泉郡至柵城府、凡三十九驛。

と見える。東國輿地勝覽^{卷四}によれば、新羅の井泉郡は今の元山の西隣の徳源であるから、これより三十九驛を、唐制三十里一驛によつて計算すれば、ほど千七百七十里となり、大體今日の琿春附近に當る。ここは唐の徳宗の貞元年間に文王大欽茂が一時上京より東南して都した所である。そこに宮殿が儼として建てられてゐたことは、遼史の地理志に「東京龍原府有宮殿、……壘石爲城、周圍二十里」とあるので、ほぼ想像がつく。豆満江の下流域は山岳重疊としてゐるが、一たび琿春河の注ぐ所に出ると、琿春・慶源の平野は潤然として打ち開けた沃野である。その琿春の西方に幾基かの古城址があり、うち所謂半拉城子が発掘の結果、龍原府址に相違ないと認められたことは既に述べた。その首州慶州は龍原・永安・鳥山・壁谷・熊山・白楊の六縣を領したといふ。慶州及び龍原縣がやはりこの府治と同所にあつたことは、名義から見ても疑ひない。なほ遼志に「高麗爲慶州」とあるのが正しければ、この地は高句麗の時代から慶州といはれてゐたやうである。また柵城の名産は豉であるといふ。豉のことは史記の貨殖傳や漢書食貨志にも見え、康熙字典には説文を引いて「配鹽幽朮也」といひ、注して「朮豆也、幽謂造之幽暗也」とあり、更に釋名を引いて「豉嗜也、五味調和、須之而成、乃可甘嗜也」ともある。納豆といふよりは、今日の味噌か味の素のやうなものである。

ここには方位距離の記述が確かでないから、他の鹽・穆・賀三州の位置については知る由もないが、傳によれば、鹽州は一に龍河郡といひ、海陽・接海・格川・龍河四縣を領し、穆州は一に會農郡といひ、會農・水岐・順化・美縣の四縣を領し、賀州は一に吉理郡といひ、洪贊・送誠・吉理・石山四縣を領したといふ。遼志に現はれたこれら屬縣の名は順序不同であるが、穆州即ち會農郡の首縣が會農縣なるが如く、鹽州龍河郡の首縣は龍河縣、賀州吉理郡の首縣が吉理縣なることは、金毓紱氏の推定の如くであらう。⁽²⁵⁾なほ推測を逞しうすれば、鹽州はその州名及び屬縣名から明かなる如く、海岸に漸した州たるこ

と疑なく、或は明清時代に今のポシェト灣の北岸に近く顏楚(Yen-chu)もしくは眼春(Yen-chun)なる地名が著はれてゐるから、それは鹽州(Yen-chou)の轉訛であるかも知れぬ。もしさうとすれば、鹽州は慶州の南に接して、豆滿江の左岸にあり、穆州・賀州はそれに連つて西方の豆滿江の右岸にあつたものであらうか。但しこれはなほ再考を要する問題である。

南京南海府は沃沮の故地で、沃・晴・椒の三州を領してゐたといふ。その三州の位置も殆ど解らないが、ただ首州の沃州は沃沮・鶯巖・龍山・濱海・昇平・靈泉の六縣を領してゐたといふ。その首縣沃沮がもし古の沃沮城と關係があれば、その地は恐らく今の咸興の邊に當つてゐたらう。果してさうなら、餘の晴州・椒州はそれぞれ、今の城津・鏡城の邊にでも配當すべきであらう。遼史地理志によると、沃州は「璽石爲城、幅員九里」とあり、東京の慶州よりは餘程小さかつた。晴州には天晴・神陽・蓮池・狼山・仙巖の五縣が屬し、椒州には椒山・貂嶺・漸泉・尖山・巖淵の五縣が隸してゐたといふ。東京が日本道なのに對して、南京は新羅道だつたといふが、續日本紀^{卷四}光仁天皇の寶龜八年の條によると、この時渤海の貢使史都蒙等は、南海府の吐號浦を發し、我が對馬島の竹室の津を指したといふ。これは我が國が北方航路を嫌つて、南方航路を太宰府に來るべきことを求めたからであらうが、それにしても南海府もまた日本道に用ひられたことが解る。寶龜八年は唐の代宗の大曆十二年で、渤海の文王大欽茂の大興四十一年(777)に當る。吐號浦は恐らく永興灣の附近であらう。渤海傳にはこの地方の名産として、「南海之昆布」及び「沃州之繇」を擧げてゐる。繇とは眞綿である。

遼史^{卷二}太祖本紀によると、天顯元年(927)正月契丹が渤海を滅ぼすと、その二月南海府は安邊・鄭韻・定理諸府と共に一時契丹に降つたが、五月忽ちまた叛旗を翻へして契丹に抗し、その討伐を受けた。これはその地が契丹に最も遠く、その威力を感ずることが弱かつたからであらう。渤海が亡びた後、この地方には蒲盧毛朶部といふものが起り、また遼軍の討伐を煩はした。高麗が三十姓部落と呼んだものが即ち是れであらう。咸興から北に峠を越えて鴨綠江の上流域に出で、江界を経て

輯安に通ずる道は、南滿洲の孔道であつて、魏の毋丘儉の進撃以來、常に利用された通路であるが、三十部女直はこの道を通つて鴨綠江畔に出で、西京鴨綠府の後に起つた定安國と共に、連りに宋朝に通貢したことは世に知られたところである。我が一條天皇の長徳中(976)北九州に來寇した所謂刀伊の賊も大體この南海府の遺民であつた。²⁸⁾

八

次ぎは高麗の故地である。高麗の故地には先づ西京鴨綠府があり、神・桓・豐・正の四州を領したといふ。その首州神州は遼史地理志によれば、「城高二丈、廣輪二十里」とあり、神鹿・神化・劍門三縣を有したといふ。その地が今の鴨綠江の上流左岸臨江縣の附近なるべきことは既に述べた。桓州は桓都・神鄉・洪水三縣を領し、京の西南二百里にありといふから、疑ひもなく、桓都(丸都)即ち今の輯安である。その洪水縣を元一統志には洪水に作り、讀史方輿紀要も滿洲源流考も俱にこれに従つてゐるが、當時の洪水は即ち清川江であるから、これは寧ろさうでなく、洪水は或は今の禿魯江で、その縣城は或は今の江界の邊にあつたのではなからうか。豐州は一に磐安郡といひ、安豐・渤海・臨壤・破石の四縣を領し、京の東北二百一十里にありといふから、今の松花江上源の撫松方面でなければ、或は東北は西南の誤りで、鴨綠江上源の厚州古邑の方面か、もしくはその先の長白・惠山鎮の地方ではなからうか。渤海の朝貢道は恐らくこの邊を経て、上京と西京とを聯絡してゐたと思はれるからである。東北を西南と改めるのは餘りに武斷のやうであるが、分水嶺を越えて松花江の上源へ出づるよりも、鴨綠江の全流域こそ西京鴨綠府の管域にふさはしいと思はれるからで、その縣名も鴨綠江畔を暗示するやうである。或は西京が臨江より西南で、ここを出てから最初の方が東北に向つてゐたために東北といはれたのではなからうか。正州は一名を沸流郡といひ、京の西北三百八十里といふから、これは古來名高い沸流水即ち渾江(佟家江)の流域で、今の

通化でなければ、桓仁の方面でもあらう。渤海傳には「丸都之季」をその地方の名産としておる。

西京鴨綠府の地は渤海の亡後、その餘類の定安國が據つたところで、後に遼の聖宗がこれを平けたから、渤海の故地ではこの地方だけが他に徙されず、そのまゝ遼の版圖に入つたのである。

高麗の故地の第二は長嶺府である。ここは瑕・河二州を領したといふ。その縣名は今傳はらないが、長嶺府が恐らく今の輝發河上流の北山城子なるべきは前に言つた。瑕州は勿論首州であるから、そこにあつた。河州はその名の如く輝發河に沿ひ、今の朝陽鎮の東方の輝發城でなければ、官街の西隣の蘇密城邊にでもあつたのであらう。少くとも輝發城即ち清初の輝發部の扈爾奇城は無双の要害であるから、遼軍を阻んだ回跋城は恐らく是れで、北山城子の長嶺府とは自ら違ふであらうといふのが、今の私の考である。輝發河の流域は平敞なる大高原で、回跋の名はこの時始めて現はれ、遼代には回跋大王府としても知られてゐる(百官志)。

高麗の故地は實は前掲の賈耽の郡國志にも明かな如く、南海・鴨綠・扶餘・柵城等の悉くを含むのであるが、ここには特に渤海人が高句麗國の中心地帯と認めたものだけを言つたのであらう。一體が高句麗の北境については、記錄にこれを明示したものがないので、從來色々の異説があつて一定しない。例へば、津田博士の如きは、これを説いて「高句麗の北境は魏代に於いても、概ね上代と同じく、鴨綠江修家江渾河と松花江及び輝發河との分水山脈にあり、たゞ好太王の時に征略せし松花江上流域の一地方(東扶餘)が東方に於いて其の外にありしに過ぎざりしなるべし」といはれ、之に對して池内博士は隋唐時代の北境をやや擴け、輝發河流域を以つて高句麗と靺鞨との接觸點と認め、東方は牡丹江と豆滿江との流域を分つ分水山脈を以つてその北境と考定せられ、日野開三郎氏も大體それに從つてゐられるやうである。しかしそれは果してどうであらうか。

三國志の東夷傳によると、高句麗の勢力は當時から既に東方の沃沮・濊貊の地を威制してゐた。だから高句麗の王は魏軍に迫られると、東沃沮へまで通れ得たのである。尤もその頃には北方に夫餘なる大國がゐて、これに對抗してゐたから、高句麗の威力もその北邊では制限されてゐたが、後に夫餘が衰へて高句麗が盛んになると、その勢力は大いに加はつた。元來が滿洲は森林と沼澤に充ち、その住民は川筋にのみゐたから、その交通路は大抵水路により、中でも黒龍江の江口から河を溯つて松花江に入り、今の哈爾濱(Harbin)附近まで來ると、ここから滿蒙界上の沃野を横ぎつて、殆ど後の滿鐵の沿線に従つて南下し、さうして南方の文明世界に通ずるのが常であつた。これは太古からの常道である。然るに南北朝の頃、北滿に起つた勿吉が元魏に通ずるためには、獨り例外をなして、松花江から更に嫩江・洮兒河を溯り、今の洮南の邊から苦心して東蒙古の荒野を過ぎ、南下して和龍即ち今の朝陽方面に達した。これは魏書勿吉傳に明記するところで、何人も周知の事實である。それでは勿吉はどうしてかういふ迂路を通つたかといふと、それは言ふまでもなく、滿洲の王者高句麗の勢力が滿鐵線の附近まで籠蓋して、勿吉の通行を阻碍したからでなければならぬ。高句麗が好太王の時から既に遼河の下流左岸の地までを併せてゐたことは一般に認められてゐるが、それが夫餘を倒してこれに代つてからは、今の遼陽・瀋陽の方面に限らず、長春・農安の本土までも悉く併せてゐたことは、上述の古今郡國志に言ふ通りであらう。昔はこれを確める手段がなかつたが、今日は踏査が能く進んで、高句麗獨特の山城が遼東半島から北は吉林の北の龍潭山まで列置してゐることを知ることが出來た。新唐書^{卷二}東夷傳末に記した一條によると、今の呼蘭河畔に據つた達末婁は「自言北扶餘之裔、高麗滅其國、遣人度那河(松花江)、因居之」と見える。これによれば、夫餘を滅ぼした勢に乗じて、高句麗は一時松花江畔まで達したのである。少くとも、吉林附近まで堅壘を築いてこれを確保したことは疑ひもない。して見れば、高句麗の西北境が輝發河流域に止まるなどいふことは到底信すべき限りでない。

高句麗の東北境についてもまた同様である。古今郡國志の編者賈耽がこれを柵城府までに限るやうに言つたのは、當時の渤海人が中京・上京の地をその本土の肅慎の地と確言したためにでも誤られたので、形勢から考ふれば、所謂肅慎の地までも、恐らく高句麗の舊地だつたのに相違ない。どうしてそれを知るかといふと、第一には渤海傳の記述である。兩唐書の渤海傳によると、初め渤海の武王大武藝が黑水靺鞨を伐つて、唐の機嫌を損ぜんとした時、王弟大門藝がこれを諫めた言を載せて、「昔高麗盛時、土三十萬、抗唐爲敵、可謂雄彊、唐兵一臨、掃地盡矣、今我衆比高麗三之一、王將違之、不可、云々」とある。武王の時はまだ渤海の最盛時ではなかつたかも知れないが、それでも既に新興の勢天を衝く概のあつた時である。その大衆が高句麗の三分の一にしか過ぎなかつたといふ。この言には當時の情勢上多少の誇張を免れなかつたとしても、以つて高句麗の盛大なことは知るべきではないか。その高句麗が豆滿江の流域以南に蹙まつてゐた筈はない。第二には渤海の建國その物の事情である。滿洲の國々は元來漢文化の影響を受けて起つたのであるから、最初の夫餘は長春・農安の方面に起り、次ぎの高句麗は輯安盆地を中心として興つた。しかし未だ嘗て東滿の蠻地に國を建てるものはなかつた。然るに渤海は初めて東滿の奥地に國を創めた。それには色々の事情もあらうが、職としてはこの時高句麗の發展が既にこの方面まで能く開拓してゐたからでなければならぬ。私はかういふ理由から、少くとも渤海の本土なる中京・上京の方面までは嘗て高句麗の勢力範圍だつたものと考へざるを得ない。話が少し横道に入つた観があるが、これは後段の靺鞨諸部の地位を論ずる時に必要であるから、敢へてここに述べた。

九

さて本論に返り、次ぎには扶餘の故地である。夫餘の名は漢代から現はれ、その盛時には東方の挹婁をも服屬させてゐた

こと、三國志東夷傳に明記する通りである。夫餘の實勢力がその後も今の牡丹江の上流域を籠蓋してゐたことは、同じ東夷傳の東沃沮の條に「北與挹婁夫餘」接とあるので明かである。もしさうでなければ、豆滿江流域にゐた北沃沮が夫餘と接しようがなくなるからである。しかし後その勢は漸く蹙まり、高句麗に壓迫され、東蒙の慕容氏に伐たれ、やがて高句麗に併されてしまつた。その本據の地が今の農安の西南方面であつたことは、松井等氏の證明以來明かなことで、池内博士がこれを阿城方面に擬てられたのは到底從ひ難い。その事は嘗て述べたからここには略す。

新唐書にいふ扶餘の故地は寧ろ最後の本土地方をいつたのであらう。その扶餘府は扶仙二州を領し、扶州には扶餘・布多・顯義・鵲川の四縣が屬してゐたといふ。扶州と扶餘縣は勿論府と同一地に治したのであらう。仙州は強師・新安・漁谷三縣を領したといふが、或は漁谷などいふ名義から推して松花江の渡河點にでもあつたものかも知れぬ。いづれにしても、扶餘府は長嶺府の北に接した府で、その地は契丹への交通の要路に當つたから、契丹道といはれ、常に勁兵を屯してこれを押いだといふ。しかも契丹が渤海を滅ぼす時、最初に陥れたのはまたこの城であつた。

鄭誼府は或は鄭誼府にも作るが、それは明かに誤寫で、鄭誼府が正しく、即ち勿吉府の異譯であらう。勿吉の名は北魏の延興五年(475)から現はれる。その事を記した魏書勿吉傳の記事から推して、津田博士はその住地を拉林河畔の石城頭子・五常縣邊に當てられたが、池内博士はこれを哈爾濱の東南阿什河畔の阿城附近に比定せられた。津田博士がかやうに南方に擬せられたのは、豆莫婁との關係で、魏書豆莫婁傳には「在勿吉北千里」とあるから、勿吉を餘り北方にしては困るといふ顧慮からであるが、それには勿吉を南に下けずとも、勿吉を憚る豆莫婁即ち呼蘭河畔の達末婁をもつと北方に上げてても解釋出来る。私はこの場合、この方面の要地阿城に擬てられた池内博士に軍配を擧げる。夫餘は平敞の地であつたが、勿吉は卑濕の地としてある。渤海傳の產物に「扶餘之鹿、鄭誼之豕」と擧げてゐるのにも能く適ふではないか。扶餘府と並んだ鄭誼

府は少し南寄りでもよさうであるが、遼史によると、鄭誼府は渤海の亡んだ後、最も屢々兵を擧げて契丹に抗してゐる。これは守將の性格にもよることだが、一には鄭誼が契丹の攻路には割合遠く、別に確固たる根據を持つてゐたことを暗示してゐる。これらの點を考慮しても、鄭誼府はもとの勿吉の本據即ち今の阿城の方面に據つてゐたことが推定されるではないか。さて鄭誼府は鄭・高(遼史には誼に作る)二州を領し、その鄭州には奥喜・萬安二縣があつたといふが、その鄭州と奥喜縣とが府と同地だつたらうと思ふ外、餘は一切不明である。たゞ扶餘の故地は北流松花江を夾んで、西南が扶餘府、東北が鄭誼府だつたことだけは能く諒解される。

一〇

次ぎに挹婁の故地であるが、説明の便宜上、先づ率賓の故地から始める。渤海傳の本文には

率賓故地爲率賓府、領華・益・建三州。

とある。實に率賓の名は突如として初めてここに現はれる。だから池内博士は「率賓府は疑ひもなく河水に因んだ名稱であるが、率賓と呼ばれた種族若くは國は置府以前にはなかつた。即ち此の府名に對する「率賓故地」は無意義な文字である。」と一蹴された。⁽³³⁾しかしこれはさう考ふべきではなく、この前代には嘗て聞えない名を以つて説明したのは、偶々率賓の住民をこの時事實征服して府を置いたことを示すものと解すべきであらう。果してこの後率賓の名は遼代にも引繼がれ、次ぎの金元時代には恤品・速頻・蘇濱などとして散見し、清代には綏芬路といひ、それが今の琿春東北の綏芬河流域の地を指すこととは紛れもない。⁽³⁴⁾綏芬河の流域では今のヴォロシロフ (Vosilov) 市は前のニコリスク (Nikolsk) で、清代には雙城子といはれ、そこは要害第一の地で、渤海式の城址が二つ相並んでゐるところからその名を得たといふ。その詳細は鳥居龍藏博士

の報告にも見える。⁽⁴⁰⁾もし果してさうなら、ここを率賓府の遺址ではなからうか。華・益・建三州についてはその屬縣名も傳はらないが、綏芬河を溯つて更に西北に行くと、滿洲地内の東寧に達する。ここは南方から烏蛇溝河が來り會するところ、もと三岔口といはれ、また一個の要衝である。その西北には大城子・小城子等の遺跡もあり、その一こそ元代の開原城で、この方面の重鎮だつたと思はれるから、⁽⁴¹⁾建益二州の一はこの邊にあつたかも知れぬ。なほ渤海傳にはこの地の名産として「率賓之馬」があけてある。この地方には南の琿春河の流域に明初の毛憐衛があり、北には清代以後の穆稜河がある。⁽⁴²⁾毛憐・穆稜即ち morin といふのは滿洲語で馬の義であるから、この方面は眞に馬の名産地であつたのであらう。

金史^{卷二}地理志恤品路の條によると、

恤品路節度使、遼時爲率賓府、置刺史、本率賓故地。太宗天會二年、以耶懶路都孛堇地瘠、遂遷于此。……世宗大定十一年、以耶懶速頻相去千里、旣居速頻、然不可忘本、遂命名親管猛安、曰押懶猛安、……

とあり、それに注して「西北至上京^(阿城)一千五百七十里、東北至胡里改^(姓三)一千一百、西南至合懶^(興威)一千二百、北至邊界幹可阿隣千戶二千里。耶懶又書作押懶」と見える。金代の恤品路は渤海の率賓府とは違ふし、また擧げられた數字は餘りに大數に過ぎて判然しないが、とも角渤海の率賓府が今の綏芬河の流域なことは疑ひなからう。

それより注意すべきことは、金代に至つて恤品路の東方千里に更に耶懶路の現はれたことである。耶懶は伊懶・押懶等の字面を以つて金史の隨所に頻見する。吉林通志^{卷一}沿革志にはこれを謂つて「扎蘭元作耶懶、蓋即今琿春以東入海之雅蘭河、所謂耶懶率賓相去千里、與今綏芬河里到、正自相符也」と述べ、またその^{卷二}輿地志山川の條には「雅蘭河在烏濟密河東、金之耶懶路、所謂耶懶・率賓相去千里者也、出錫赫特山、南入海、海自其處趨而北、衆水皆自西入之」とも見える。金朝は耶懶の土地瘠薄なるを以つてその地の經營を疎かにしたが、清初に至つて太祖が東海諸部を経略すると、その地はまた雅攏・

雅蘭・鴨藍等の字面を以つて現はれ、清は更にその東方の錫林（西臨）の地方をまで收服した。⁽⁴³⁾ 清内府一統輿地祕圖やダンヴィル (D'Anville) の支那新圖などにはこの Yalan 河・Sirin 河なつて標示してゐるが、圖形が不正確なため、これを今の何河に擬すべきか、その比定は困難である。しかしこれらの河名が當然雅攬路及び錫林路と關係あるべきは疑を容れない。今の地圖を按ずるに、綏芬河流域の東方で一地方の中心となるべき地域は、アメリカ灣に注ぐスーチャン河の流域の蘇城地方と更に東のオリガ灣に注ぐモフカ河の流域のみである。さうして蘇城には現に儼然たる古城址もある。私はこれこそ雅攬及び錫林の地ではないかと思つてゐる。これらの地方は漸く近代になつて、次第に漢人に知られて來た方面である。

考へて見るに、滿洲の奥地では、古來の大道である黒龍江の流域を除き、烏蘇里江の流域は一面の沼澤沮洳の地で漫りに近づき難いこと周知の通りである。その先きのシホタアリン (Sikhota Alin) の山地も氣候は酷烈で土地は瘠薄で、僅に土人の漂浪に適するのみ。日本海の沿岸も森林が直に海岸に迫り、海中には寒流が流れてゐて、北緯四十五度以北では從來の人間には發展の餘地もないといふ。随つてこの方面で相當の開發の期し得られるのは、興凱湖より南方で、朝鮮に連る海岸一帯の地方だけといふことである。金元時代の經營の迹がこの方面にのみ遺つてゐるのは決して偶然ではない。

さて翻つて再び渤海傳に返ると、今度こそ挹婁の故地である。挹婁は滿洲奥地の蠻民であつて、その名は魏晉の際にのみ現はれ、その後は勿吉となり、靺鞨と變つた。三國志の東夷傳によると、挹婁は夫餘の東北千餘里にありといふから、殆ど今の阿城の方面かと思はれるが、同時に挹婁は沃沮の東隣の海濱にあり、船に乗つて連りに沃沮を寇掠するので、沃沮はこれを畏懼したといふ。今の阿城の方面と浦港の地方とは方向も距離も霄壤の差であるから、後世でもその民族は同一ではなかつた。⁽⁴⁴⁾ 三國の當時もそれは違つてゐたに相違ないが、魏人はまだ認識が不足で、遠夷を一樣に挹婁といつたのであらう。眞の挹婁の本據がどこであるかは今日なほ明かでない。池内博士や津田博士は寧古塔附近を挹婁の本據と決めてゐられる。⁽⁴⁵⁾

が、そこは當時は夫餘の領分だつたこと、上述の通りであるから、兩博士の説は承け容れ難い。渤海の人士も勿論挹婁の故地は確指し難かつたのであらうが、少くとも挹婁が沃沮の東方で海潮にあつたことだけを推知してゐた。だからこの東海の地域を挹婁の故地と考へたのであらう。

定理府は挹婁の故地であつて、定・潘二州を領したといふ。その定州は一に安定郡といひ、定理・平邱・巖城・慕美・安夷五縣を領したといふ。定州及び定理縣は府と同治で、恐らく後の雅攬路即ち今の蘇城の邊にあつたのではないか。潘州は遼史地理志には潘州に作る。渤海の故縣は九あつたといふが、金毓紱氏は潘水・安定・保山・能利の四縣だけを考定してゐる。⁽⁴⁶⁾ 潘水が首縣だつたのから見れば、潘州よりは潘州が正しいのであらう。明代の建州衛名の起源である建州は實は今の吉林にあつたのであるが、その名は渤海の率賓府の建州の名を襲つてつけられたやうに、この潘州が後の潘州即ち潘陽の名の起源になつたといふことは、或は承認すべきかも知れぬ。たゞそれらの位置は凡べて審かでない。

安邊府は安瓊二州を領したといふが、その屬縣の凡べても明かでない。しかしこの定理安邊二府が俱に挹婁の故地といふところから見ると、兩者が相近接してゐたことは疑ひなく、それが率賓府に隣つてゐるところからすれば、これらが率賓府の東方に連つてゐたことをも十分想像出来る。さうとすれば、前述の知識と綜合して、定理府が雅攬路とすれば、安邊府は錫林路であり、安邊府が蘇城地方とすれば、定理府はオリガ地方である。之をいづれかに決定する資料はないが、ロシア人の紀行によると、オリガの北方には一條の長城があるといふから、安邊府の名義から考へて、これを極邊と認め、假りに安邊府を後の錫林路で、今のオリガ地方と推定して置く。定理・安邊の二府が渤海の亡後、恐らく南海府とも示し合せて、屢次契丹に抵抗したといふのは、やはりこの地が契丹に最も遠くその威力を十分に感じなかつたためであらう。渤海傳によると、宣王大仁秀は「頗能討伐海北諸部、開大境宇、有功」とあるが、それこそこの地方の平定をいつたのであらう。いづれ

にしても、この地方のかくの如く開發されたことは、歴史上空前絶後のことといつてよいであらう。

一一

次ぎに拂捏の故地なる東平府である。その事は渤海傳の本文に

拂捏故地爲東平府、領伊蒙沱黑比五州。

とあり、別に拂捏諸部については同書卷二の黑水靺鞨傳の末に左の如くある。

初黑水西北、又有思慕部、益北行十日、得郡利部、東北行十日、得窟說部、亦號屈說、稍東南行十日得莫曳皆部。又有拂涅・虞婁・越喜・鐵利等部。其地南距渤海、北東隅於海、西抵室韋、南北袤二千里、東西千里。拂涅・鐵利・虞婁・越喜、時々通中國。而郡利・屈說・莫曳皆、不能自通。今存其朝京師者附左方。拂涅亦稱大拂涅、開元・天寶間八來、獻鯨睛・貂鼠・白兔皮。鐵利開元中六來。越喜七來、正元中一來。虞婁貞觀間再來、貞元一來。後渤海盛、靺鞨皆役屬之、不復與王會矣。

之を冊府元龜に照合するに、拂涅の通貢は頻繁を極め、開元二年から同二十九年に及び、實は十數回に及んでゐる。唐書の計算は杜撰なのである。卷八但しこれだけでは拂涅の位置は到底知り難い。少し煩雜だが、初めて拂涅のこの出て来る隋書卷八の靺鞨傳について、所謂靺鞨七部のことを考究しなければならぬ。隋書に曰く、

靺鞨在高麗之北、邑落俱有酋長、不相總一。凡有七種、其一號粟末部、與高麗相接、勝兵數千、多驍武、每寇高麗中。其二曰伯咄部、在粟末之北、勝兵七千。其三曰安車骨部、在伯咄東北。其四曰拂涅部、在伯咄東。其五曰號室部、在拂涅東。其六曰黑水部、在安車骨西北。其七曰白水部、在粟末東南。勝兵並不過三千、而黑水部尤爲勁健、自拂涅以東、

矢皆石鏃、即古之肅慎氏也。

本文とほど同様なのが、北史の靺鞨傳に見え、ややその異文と覺しきものが、新唐書の黑水靺鞨傳に見える。いづれも誤脱が多く、根本の本書による外はない。但しそれらによつて、本文の粟末部は粟末部の誤で、白水部は白山部の譌なことは能く解る。これは言ふまでもなく、隋が南北を統一し、北方の突厥までを屈せしめたので、その威力を感じた高句麗北邊の諸部が相率ひて通貢して來たので、その間の消息が知られた結果の記載である。それは同傳の中にも「開皇初、相率遣使貢獻、云々」とあり、殊に隋朝に最も近い粟末部の渠帥度地稽等が煬帝に投降して善戦した始末を叙してゐるのでも明かである。但しその中には幾多の誤聞もあつて、例へば名もなき伯咄部が「勝兵七千」といひながら、尤も勁健だといふ黑水部等が「勝兵並不過三千」といふやうな自家撞着を來してゐるのでも明白であり、その他「有酋長不相總」とか、「自拂涅以東、矢皆石鏃、即古之肅慎氏也」などといふ語も、大體前史の句を踏襲してゐるのであつて、俄にそのままには信ぜられない。

この本文を最初に精究したのは吉林通志^{卷一}の編者であつて、それによれば、粟末部は今の吉林・烏拉の一帯、伯咄部は伯都訥地方、安軍骨部は即ち金代の按出虎、今の阿勒楚喀で、賓州・五常廳の方面と決定した。數百年後に初めて出て來る伯都訥(Petune)や阿勒楚喀(Alchukha)の別譯がこの時既に現はれるのは、聊か不思議であるが、しかし方位名稱悉く合致するので疑問はない。これらの比定は頗る妥當であるので、後の學者は松井氏でも池内博士でも日野氏でも皆これを肯定された。⁴⁸私の考では前述の如く、吉林烏拉は高句麗の版圖内であるから、粟末部は少し下流に移したいと思ふだけである。これまでは問題はないが、問題になるのは拂涅・號室等の諸部である。

吉林通志の編者は拂涅を渤海の上京以北とし、號室をその東方に擬した。今その論旨は簡潔であるから、その全文を引か

う。

今寧古塔城西南八十里古城、俗呼東京城、亦曰佛訥和城、即明佛訥和衛地、與拂涅音近、又在伯咄東、知爲寧古塔地、信而有徵、其北無別部、則固兼有三姓矣。號室部在拂涅東、則寧古塔以東、三姓・富克錦以南、皆應屬之。

しかし、それは少し肯ひ難い節が多いので、池内博士は全然これと違ふ意見を提出された。池内博士は契丹が渤海の扶餘城攻陷以前に連りに渤海の地を侵した例證を挙げ、遼史^{卷三}地理志遼州の條に「遼州始平軍、下節度、本拂涅國城、渤海爲東平府、……太祖伐渤海、先破東平府、遷民實之、故東平府都督伊蒙陀^北黑北五州、共領縣十八、皆廢、太祖改爲州」とあるのを参考とし、拂涅部は契丹が最初に取つたところであるから、これは契丹に近くあらねばならぬと考へ、拂涅を遼代の寧江州即ち今の拉林河上流の大榆樹とし、號室を直ぐその東の五常縣とされた。⁽⁴⁹⁾しかしそれは餘りに迫切した地域なので、後に號室だけを敦化の方面に移された。⁽⁵⁰⁾津田博士も初めは池内博士の説に従はれたが、後には拂涅部を今の三姓の東の螞蜒河流域に移された。⁽⁵¹⁾之に對して全く異様の見解を示されたのは日野氏である。日野氏は大規模の「靺鞨七部考」を著はし、その一部として七部の住地を考へ、これは特別の交通路によつて知られたものとし、伯都訥から眞直ぐ東方に行くと、綏芬河の上流域に出るから、ここが拂涅の中心地であつて、大拂涅の範圍は西は寧古塔方面から北は穆稜河流域に及び、東は海に至るものと考定された。それは上掲の新唐書黑水靺鞨傳の末尾の文を誤讀し、その「其地南距渤海、北東隅於海、云々」は黑水靺鞨・思慕部・郡利部・屈說部を首め拂涅諸部の全域を指していつたのを、拂涅部以下にのみかゝるものと速斷されたからである。日野氏は續けて曰く、拂涅部が既に東海に達してしまへば、號室部はその東に置き難いから、これは實は東北に當り、黑龍江口の窟說部が即ち號室部なのである。窟說の名は黑龍江の流域を通じて知られたのに反し、號室部はこの南方の交通路によつて知られたから、名を異にするが、號室は即ち窟說の別譯に過ぎぬといふのである。⁽⁵²⁾

これら諸説の批判は、後に自説を説く時に自ら明かであるから、ここには一々辯駁しない。とも角、粟末・伯咄・安車骨と順次に述べて、次ぎに及ぶべきところを、また伯咄から出發したので、遂にかくの如き誤解を生じたのである。それでは拂涅は果してどこか。私の見るところでは、問題はそんなに困難な疑題ではない。拂涅は唐書や冊府元龜でも解る通り、渤海が相當に北方に發展した後も、開元の末年まで獨立して唐に通じてゐた部族であり、池内博士も證明された通り、契丹からは最初に伐たれた部落である。つまり渤海からは割合遠く、契丹からは最も近い地位にあつたのである。さういふ條件を備へたところは、今の哈爾濱の北岸の呼蘭河の流域より他にはない。ここは元來達末婁族の據つた所ではあるが、達末婁は初めから微弱であつたから、これに代つて起つたのが、拂涅部なのであらう。ここへ達するには今もその往來のある通り、伯咄即ち伯都訥から直に松花江を北に渡つて今の肇州に出で、東するのが順路である。だから隋書には伯咄から數へて、その東方と稱したのであらう。勿論その東南の安車骨を東北といひながら、ここを東方と稱したのは隋書の編者の杜撰ではあるが、兩者を俱に東北と指稱することは困難であつたので、さういふ結果になつたのである。

拂涅が呼蘭河の流域とすれば、その東方の號室部は當然この方面の要地三姓附近でなければならぬ。松花江の流域が順次に知られない筈はないから、かう解すれば、凡べてが最も矛盾なく解ける。

次ぎは即ち黒水部である。隋書にはこれを「安車骨の西北に在り」といつたが、その西北が實は東北の誤なることは何人も認めざるを得ぬところである。黒水については、箭内互博士が唐の開元年間に置かれた黒水府を今の三姓とし、黒水部の位置を三姓から同江に至る松花江の下流域と比定して以來、やゝ一般に従はれてゐるが、それは明かに誤解である。黒水韃韃の位置を最も明確に傳へたのは兩唐書の室韋傳であつて、例へば舊唐書^{卷九}室韋傳にはその狀を述べて左の如く見え、

室韋者契丹之別種也、居狂越河北、其國在京師東北七千里。東至黒水韃韃、西至突厥、南接契丹、北至于海。……其北

大山之北、有大室韋部落。其部落傍望建河居、其河源出突厥東北界俱輪泊、屈曲東流經西室韋界、又東經大室韋界、又東經蒙兀室韋之北、落俎室韋之南、又東流與那河・忽汗河合、又東經南黑水靺鞨之北、北黑水靺鞨之南、東流注于海。
新唐書^{卷二}九の室韋傳には同じ事を述べて、

室韋契丹別種、東胡之北邊、蓋丁零苗裔也。地據黃龍北、傍狃越河、直京師東北七千里。東黑水靺鞨、西突厥、南契丹、北渤海。……北有大山、山外曰大室韋、瀕於室建河、河出俱倫、迤而東。河南有蒙瓦部、其北落坦部。水東合那河・忽汗河、又東貫黑水靺鞨、故靺鞨跨水、有南北部、而東注於海。

とある。室韋のことは白鳥博士の研究に詳かであるから、今は略す。右の中、京師は勿論長安で、黃龍は今の北京の方面、那河は本來嫩江の別譯であるが、ここにはその下流の東流松花江の全流を含んでの稱、忽汗河は即ち牡丹江である。望建河・室建河はフルン (Hulun) 泊から出るアルグン (Argun) 河とも混同されてゐるが、室建河が正しく、即ちシルカ (Shilka) 河の音譯で、即ち黑龍江の上流であるといふ。それが東流して北黑水靺鞨の南、南黑水靺鞨の北を過ぎて、末は海に注ぐといふのである。忽汗河が那河に合して、それから黒水に入るのであるから、ここに「水東合那河忽汗河」といふやうにいふのは少し變であるが、忽汗河が有名であるので、かういふ記述になつたのであらう。黒水とは、白鳥博士も言はれるやうに、清澄な黑龍江が混濁の松花江に合すると、暫くその清澄な水が黒色に見えるところから起つたのだといふから、勿論合流後の黑龍江を指す。滿洲の土語ではこれを *Salatyan ula* といふが、即ち黒水の義である。これに龍字を加へたのは漢人の趣味で、私の管見の及ぶ限りでは、明の鄭曉^(せう)が烏龍江と呼んでゐるのが最初のやうである。清の實錄によると、太祖が東海薩哈連部を征した時にも、この部落は薩哈連江即ち黒水の南北に互つて三十六寨に分れてゐたといふ。この黒水靺鞨を松花江の下流域だとすると、上に掲げた唐書に室韋は「東至黒水靺鞨」とあり、また太平寰宇記^{卷一}七五等に黒水靺鞨は「西至室韋」

とあるのを何と解釋したらよいか。到底道理が通じないではないか。

なほ黒水靺鞨については、舊唐書^{卷一九}靺鞨傳の末に、靺鞨七部の分散した後を受けて、

唯黒水部全盛、分爲十六部、部又以南北爲柵。開元十三年、安東都護薛泰請於黒水靺鞨內置黒水軍、續更以最大部落爲

黒水府、仍以其首領爲都督、諸部刺史隸屬焉、中國置長史、就其部落監領之。十六年、其都督賜姓李氏名獻誠、授雲麾將軍、兼黒水經略使、仍以幽州都督爲其押使。自此朝貢不絕。

とあり、新唐書^{卷二}靺鞨傳にはそれを

開元十年、其酋倪屬利稽來朝、玄宗卽拜勃利州刺史。於是、安東都護薛泰請置黒水府、以部長爲都督刺史、朝廷爲置長史監之。賜府都督姓李氏、名曰獻誠、以雲麾將軍領黒水經略使、隸幽州都督。訖帝世、朝獻者十五、大曆世凡七、貞元一來、元和中再。

と整備粉飾してゐる。これを兩唐書の渤海傳と併せ考へると、それはかういふ事なのである。高句麗を滅ぼした新興の唐が忽ち武・章の内亂に逢ひ、國政が紊れると、契丹は叛き、渤海は獨立した。そこで渤海は黒水と共に突厥に通じ、その監督官なる吐屯の配屬を受けたが、唐に玄宗が出て、再び國威を振ふと、黒水は獨り唐に通じてその官職を受けたので、渤海王大武藝は怒つて黒水を伐つた。前に言つた王弟大門(文)藝が渤海王を諫止したのはこの時のことである。しかも渤海の討伐はその效がなく、黒水は依然として唐朝に貢したといふのである。尤も新唐書の渤海傳には「武藝立、斥大土宇、東北諸夷畏臣之」と見えるから、多少の効果はあつたのであらう。大欽茂の時都を中京から北方の上京に遷したのも、この形勢に應ずるものでなければならぬ。唐會要^{卷九}の靺鞨の條の末尾には、「及渤海浸強、黒水亦爲其所屬」ともある。黒水靺鞨の唐朝貢が天寶の末年を以つて一時途絶えたのは恐らくこの事實を示す。しかし渤海の末王の時には、黒水は忽ちまた中原

へのに通貢を始めるのである。

いづれにしても、唐は開元十年即ち渤海の武王の仁安四年(722)に黒水の酋長倪屬利稽の投降を受け、玄宗はこれに勃利州の刺史を授け、同十三年その地に即いて黒水軍を置き、やがてこれを都督府に上し、倪屬利稽をその都督とし、長史を遣はして之を監督せしめ、十六年にはその都督に李獻誠の名を賜ひ、雲麾將軍兼黒水經略使を授け、唐の幽州都督をその押使としたといふのである。その所謂最大の部落が即ち勃利州なることは明かである。吉林通志の編者はこの勃利州を以つて、今の伯利即ちハバロフスク(Khabarovsk)に比定し、白鳥博士もそれに賛成せられた。⁽⁵⁶⁾池内博士は黒水が果して黒龍江なるかをも疑ひ、冊府元龜^{卷九}七五には勃利州を勃州に作つてゐるから、伯利ではないと言はれたが、州名を一字にするのは漢人の風習に過ぎぬ。ハバロフスクはこの方面最大の要衝であるから、私は勃利州が即ち伯利なることを疑はない。否、或は晉書^七卷九に出て来る裨離等十國の裨離も是れではないかと疑つてゐる。なほ例の賈耽の道里記によると、渤海の上京龍泉府は「城臨忽汗海、其西南三十里、有古肅慎城。其北經德理鎮、至南黒水靺鞨千里」とある。德理鎮は後述の如く、今の三姓の附近であるから、そこを經て千里といふ南黒水靺鞨は到底松花江の下流ではなく、それより遙か北方の黒龍江流域でなければならぬ。これは殆ど自明のことである。

實は黒水靺鞨の住地については、白鳥博士の室韋考^{史學雜誌}三〇ノ四に詳かであつて、更に説くべき餘蘊はないが、餘りに松花江下流域説が強いので、ここに一言を費したまでである。

最後に白山部である。白山部についても、吉林通志がこれを「白山部在粟末東南、則國初長白山二部及今之敦化縣・琿春城、皆其地也」と主張して以來、津田博士も「今の瑚爾喀河の上流域及び海蘭・布爾哈圖二河の流域」とし、池内博士に至つては固く今の東間島説を支持してゐられるが、白山部は決してさやうな遠方ではない。繰返して言ふが、靺鞨七部は隋が粟

末靺鞨の方面より聞き知つたことであるから、さやうな隔離した地方に觸れるべき道理はない。新唐書の黒水靺鞨傳によると、所謂靺鞨の七部は互に「部間遠者三四百里、近二百里」といふではないか。各部は相當に廣大な面積に擴がつてゐたら、その間が近かつたのもあらうが、それにしても、東間島では餘り隔たり過ぎてゐる。第一それでは粟末の東南に在りといふ本文にも合はない。吉林通志には「則國初長白山二部」といふが、清初に長白山部といはれた朱舍里 (Jushen)・訥殷 (Neyen) の二部は明かに松花江の最上源で、白頭山の西北方面にあつた。隋代の白山部も必ずここにあつたのに相違ない。現に隋書の靺鞨傳には七部のことを説いて、「然其國與隋懸隔、唯粟末・白山爲近」と明記してゐるではないか。粟末と共に隋に近かつたといふ白山部は粟末水の上游で、長白山の西方にあつたことに疑ひはない。

勿論そこは高句麗勢力の眞只中で、北邊の別部ではない。思ふに、新興の靺鞨部が發展すると、松花江に沿つて次第に溯り、この長白山麓の曠野に據つて、そこに自ら別勢力を形成してゐたのであらう。白山部が高句麗國內であつたことは兩唐書にも明かに認め、舊唐書の靺鞨傳には

其白山部素附於高麗、因收平壤之後、部衆多入中國。洎咄(即ち伯咄)・安居骨(安車骨)・室(號室の誤脫)等部、亦因高麗破後、奔散微弱、後無聞焉、縱有遺人、並爲渤海編戶。唯黑水部全盛、分爲十六部、部又以南北爲柵。

と見え、同じ事を新唐書の黒水靺鞨傳には

白山本臣高麗、王師取平壤、其衆多入唐、洎咄・安居骨等、皆奔散、寔微無聞焉、遺人迸入渤海。唯黑水完疆、分十六落、以南北稱、蓋其居最北方者也。人勁健、善步戰、常能患它部。俗編髮、綴野豕牙、挿雉尾爲冠飾、自別於諸部。……とある。但しその黒水部のことは唐初の状態をいつたのである。

いづれにしても、かくして所謂隋代の靺鞨七部は唐初の高句麗滅後の擾亂の間に亡んだ。その中後に残つたのは、割合強

大だつた黒水の他に、拂涅と粟末の三部のみ。白山は高句麗の國內にあつて消滅した。他の三部、伯咄・安車骨と號室とは松花江航路の要害に當り、擾亂の中心だつたから遂に残存し得なかつたのであらう。さうしてその後へ起つたのが、扶餘・鄭誼及び鐵利・越喜・虞婁等の諸部だつたのであり、渤海が後に悉くこれらをも併有したのである。

一一一

さて漸く本論に立ち返り、渤海は拂涅の故地を以つて東平府となし、伊蒙沱黑比五州を領せしめたといふが、その蒙州に紫蒙縣があつたといふことの外は一切不明である。ただここはもと大拂涅とも稱せられたところで、廣大な地方を占めてゐたから、五州もの多數を領してゐたのであらう。その管域は鄭誼府の北に接し、呼蘭河の流域は勿論、東は巴彥・木蘭の方面にまで及んでゐたのであらう。

次ぎは鐵利の故地に據つた鐵利府である。鐵利は渤海に従ふと間もなく、我が國にも通貢したものと見え、我が國の記録によると、聖武天皇の天平十八年及び光仁天皇の寶龜十年等に渤海の使節と伴つて我が國に通じてゐる。天平十八年は唐の玄宗の天寶五載、渤海の文王の大興十年(689)で、寶龜十年は唐の代宗の大曆十四年、渤海文王の大興四十三年(779)に當る。鐵利が獨立に唐に朝貢してゐたのは開元の末年までであるから、天寶の初めには既に渤海に従へられてゐたのであらう。その後百數十年契丹が渤海を滅ぼすと、途端に鐵驪(即ち鐵利)はまた契丹に朝貢を始め、遼末にまで及んだ。その間或は高麗にも通じ、宋にも貢獻した。遼史^{卷一}聖宗本紀によると、開泰元年(1012)の條に、

八月丙申、鐵驪那沙等送兀惹百餘戶至賓州、賜絲絹。是日、那沙乞賜佛像・儒書、詔賜護國仁王佛像一、易・詩・書・春秋・禮記各一部。

とあり、高麗史^{卷五}顯宗世家二十一年(1030)夏四月の條によると、

己亥、鐵利國主那沙遣女眞計陁漢等來獻貂鼠皮、請曆日、許之。

とも見える。遼代の賓州は北流松花江の江畔、今の遜札堡(五家站)の對岸附近なるべしといふ。⁽⁶⁰⁾とに角、鐵利はかくの如き開明の地域だつたのである。

池内博士はこの鐵利に對して至大の關心を示し、厖大なる勞作「鐵利考」を著はして、その始末を考へ、鐵利の本據は今の阿城の附近ならざるべからずと論定された。⁽⁶¹⁾即ち博士によれば、今の阿城の方面は嘗て夫餘の據るところとなり、更に勿吉の根據となり、今また鐵利の本據となり、後には生女直即ち金朝發祥の本土となつたわけである。博士は一方の要地に凡べてを集中される傾向があるが、それは果して正しいであらうか。少くともこの場合、阿城は既に勿吉即ち鄭誦府の本地であるから、そこに重ねて鐵利府は置き得ない。鐵利の故地は必ずその東方に連る要地で、今の三姓の方面でなければならぬ。それは空言ではなく、そこには確かに鐵證があるのである。

前述の賈耽道里記によれば、渤海の上京龍泉府から北は德理鎮を経て、南黒水靺鞨に至るべしといふ。池内博士はこの德理鎮を以つて、忽汗海北方の熔岩原野の德林石に比定せられたが、鎮といふのは恐らく市鎮の義であらうから、これを石原に擬するのは頗る怪しい。況して德林石はやく西方に偏してゐて、上京から北方へ行くのには必ずしもそこを經由しない。これはやはり松井等氏が早く想定せられた如く、元明時代の斡朵里站と同じく、牡丹江が松花江に合流する地點の左岸、今の三姓の對岸の鎮名であらう。⁽⁶²⁾その證據には唐會要^{卷九}靺鞨の條に

今黒水靺鞨界、南與渤海國德理府接、北至小海、東至大海、西至室韋、南北約二千里、東西約一千里。

とあり、宋の樂史の太平寰宇記^{卷一}七五にも、これを承けて、同様に記してゐるので明かである。⁽⁶³⁾その德理府が即ち德理鎮なる

ことは言ふまでもあるまい。然るに渤海の五京十五府の中には德理府なる府名はないから、これこそ同音の鐵利府に相違ないこと、嘗て津田博士が提言し、白鳥博士が證明せられた通りでなければならぬ。⁽⁶⁴⁾

鐵利の故地は果して三姓の西面にあつた。その迹に建てられた渤海の鐵利府は廣・汾・蒲・海・義・歸の六州を領してゐたといふ。その六州については一切審かでないが、この順次に記された渤海の鐵利府は拂涅府・鄭誦府の東に接して、晉に幹朵里の附近のみでなく、松花江の南北を包んで、今の方正・通河は勿論、蜚蜺河の流域をも含み、南は牡丹江の流域を溯つて、直に上京龍泉府に接してゐたのであらう。牡丹江の流域がこの方面の大交通路であつたことは言ふまでもない。されば明初の幹朵里・火兒阿（三姓）の諸部はこの道を通じて容易に高麗に通じたのであり、後にはこの道に従つて南下したのである。元末の鯨海千戸速哥帖木兒が身は恐らく今の琿春の方面にありながら、三姓以下の地方をその勢力圏内と稱した所以である。⁽⁶⁵⁾ 渤海が鐵利を下すや、直にその部人を伴つて日本に朝貢したのは、一にはこの大部を降した成功を誇示するためであつたであらうが、一にはこの道が通じ易かつたためでなければならぬ。少くとも後の鐵利が連りに高麗に通じたのは、やはりこの通路によつたのである。

池内博士は阿城方面に興つた鐵利は渤海の亡後、東京城の故址に據つた。だからその文化が榮えたのである、といふやうに解釋されたが、果してさうなら、その鐵利の獻じた兀惹の戸は當然渤海の契丹道に當る扶餘府の方面に安置せらるべきに、前に引いた遼史によると、鐵利の獻じた兀惹の戸は遙か北方の賓州に置かれた。これは全盛當時の鐵利も依然として松花江流域に據つてゐたことを暗示するものではなからうか。否、池内博士は鐵利を阿城方面に擬定されたので、遼の中頃に生女直完顔部の同地に興起するに會するに及び、その鐵利の始末に困じ、さてこそ鐵利の移遷を案出されたのであるが、事實は最初から幹朵里の方面にゐた鐵利は遼末まで依然としてその本地を變へなかつたやうである。それは次ぎの越喜の問題と關

連して自ら明かである。それには先づ越喜の住地を考へて見る必要がある。

一三

越喜の故地についても、池内博士が詳論された。⁽⁶⁶⁾博士によれば、越喜は今の長春の西方、懷德方面にゐたのである。その理由は第一に、舊唐書^{卷一九}の渤海靺鞨傳には、振國即ち渤海獨立當時の境域を記して、

其地在營州之東二千里。南與新羅相接、越喜靺鞨、東北至黑水靺鞨、地方二千里。

とあるが、越喜靺鞨の上に脱字があつて、方位が明かでない。然るに同じ史料を傳へたに相違ない冊府元龜^{卷九}には明白に

振國本高麗、其地在營州之東二千里。南接新羅、西接越喜靺鞨、東北至黑水靺鞨、地方二千里。

とあるから、越喜が渤海の西隣であつたことは先づ間違ひない。尤も新唐書^{卷二}の渤海傳には「地直營州東二千里、南與新羅以泥河爲境、東窮海、西契丹」とあるが、それは後の「地方五千里、戶十餘萬、勝兵數萬」といはれた渤海の盛時を言つたもので、即ち初めは西は越喜と界してゐたものが、後にこれらを併呑して契丹と直接するに至つたものである。次ぎに遼史^{卷三}の地理志を見ると、「信州彰聖軍、下節度、本越喜故城、渤海置懷遠府」とあり、信州は今の懷德の附近である。(實は信州は懷德の西方約百五十支里の新集廠である)。遼史地理志はいつも移徙後の情態を傳へて信憑出來ないが、この場合に限り、前後の事情もよく合ふから、越喜の故地は即ち今の懷德である、といふのである。

一應尤もに說かれてゐるが、しかしなほ一考して見ると、渤海の盛時に扶餘府の西に、懷遠府九州といふやうな大きな府があれば、何故に扶餘府が獨り契丹防禦の衝に當り、契丹道と稱せられてゐたか。それが解らなくなるではないか。況して懷遠府は孤立してあるべきではなく、必ず安遠府と相連つて同一地方にあるべきである。遼史地理志は勿論當てにならない

し、冊府元龜は最も誤植の多い本であるから、それらを以つて論據とすることは方法論的にも錯誤である。越喜は固より前に掲げた新唐書黑水靺鞨傳にも「又有拂涅・虞婁・越喜・鐵利等部、其地南距渤海」とある通り、渤海北邊の部落であつて、西方の部落ではない。その事は實は池内博士の論證に最も詳かな遼代の五國の記事中に顯はれてゐるのである。

遼史^{卷三}の營衛志下には特に五國部といふものを説いて、

五國部。剖阿里國・盆奴里國・奧里米國・越里篤國・越里吉國、聖宗時來附。命居本土、以鎮東北境、屬黃龍府都部署司。

とあり、また同じき聖宗本紀^{卷一}開泰七年（1013）三月の條には、

命東北越里篤・剖阿里・奧里米・蒲奴里・鐵驪等五部、歲貢貂皮六萬五千・馬三百。

ともある。さうして恐らく宋會要に據つた馬端臨の文獻通考^{卷三}女眞の項には、同じく五國のことを言つて、

女眞外、又有五國、曰鐵勒、曰噴訥、曰玩突、曰怕忽、曰咬里沒、皆與女眞接壤。

とも見えてゐる。その鐵勒が鐵驪即ち鐵利で、噴訥が盆奴里・蒲奴里に當り、玩突が越里篤で、怕忽が剖阿里、咬里沒が奧里米の別譯に外ならぬことは池内博士が詳かに論證し、白鳥博士もこれを承認せられたところである。⁽⁶⁷⁾池内博士はその住地を考へて、これらを悉く今の松花江の下流、三姓以下同江に至る地域とし、越里吉を三姓、盆奴里を屯河口の固木訥城、越里篤をその下流の瓦里和屯、剖阿里を富克錦、奧里米を即ち鄂里米と比定せられた。⁽⁶⁸⁾蓋し當らずと雖も遠からざるところであらう。少くともその力を籠めて證明された越里吉が後の胡里改路治即ち今の三姓なることは毫末の疑ひもない。

といふのは、越里吉の名は他の機會にも屢々遼史に現はれるからである。例へば上に引いた營衛志五國部の續きには、重熙六年、以越里吉國人尙海等訴酋帥渾敵貪汚、罷五國酋帥、設節度使以領之。

とあり、同じ事を興宗本紀^{卷一}重熙六年(1038)八月の條には、

北樞密院言、越棘部民苦其酋帥坤長不法、多流亡。詔罷越棘等五國酋帥、以契丹節度使一員領之。

とある。越棘が越里吉の略譯で、坤長が渾徹の別譯なことは言ふまでもない。越里吉は五國の中でも特に要地であり、全體を統ぶる位置にあつたので、遼はその酋長の不法を罰してこれを廢黜すると共に、五國の酋帥を罷めて、契丹の節度使一員を置いてこれを領せしめたのである。越里吉の地が三姓なることは推察に餘らう。さうして私はこの越棘こそ問題の越喜に相違ないと思ふ。

遼代の五國部はそのまゝ金代に引き續がれ、その最初の城は五國頭城と呼ばれた。即ち宋の徽宗・欽宗の流竄された所である。松井等氏は五國頭城は金の胡里改路治で、上京(阿城)の東六百三十里に當るからとて、今の三姓に比定し、池内博士もこれに賛成せられた。元代に至つても五國の後にはなほ存し、元が北滿を經營するや、この地に五萬戶府を列置して、北邊を撫鎮せしめた。元史^{卷五}地理志に

元初設軍民萬戶府五、撫鎮北邊。一曰桃溫、距上都四千里。一曰胡里改、距上都四千三百里、大都三千八百里。一曰幹朶憐。一曰脫幹憐。一曰孛苦江。各有司存、分領混同江南北之地。

とあるものが是れである。永樂大典に引いた經世大典站赤の條によると、滿洲に置かれた百二十の驛站の名前が詳かに挙げられて居り、勿論松花江から黑龍江に通ずる站名も一々掲げられてゐるが、この五萬戶府のところだけ站名がない。明の實錄によると、ここに驛站のあつたのは當然であつて、その站名も知られてゐるが、經世大典にはそれが缺けてゐる。元朝の方針として蒙古は固より凡べて塞外の要地は漢人に知らせないことになつてゐた。だからこの站名も秘してあつたものと見える。それほどここは重要な地點だつたのである。然るに元末の擾亂にその五萬戶府の中、北方の二萬戶府は亡んでしま

つたものと見え、明初はたゞ残りの三萬戸のみあつた。朝鮮の龍飛御天歌卷七移闌豆漫(三萬戸)の注に

斡朶里地名、在海西江(松花江)之東、火兒阿江(忽汗河即ち牡丹江)之西。火兒阿亦地名、在二江合流之東、蓋因江為名也。托溫亦地名、在二江合流之下。二江皆自西而北流、三城相次沿江。

とあるのが是れであつて、私共が斡朶里(Odoh)・火兒阿(Huckha)・托溫(Tam)等の地を確知することが出来るのは全くこれによるのである。明の太祖は乃ちそこに三萬衛を置かんとしたが成らず、三萬衛は遂に今の開原に退處することになった。衣朗哈喇即ち今の三姓の名はその地に住する土人の三姓から起つたといふが、或はこの三萬戸と關係あるものかも知れぬ。話は大分枝葉に涉つたが、三姓はとも角かくの如き重要な地點である。さうして私はここを越喜の故地なのだらうと思ふ。越喜が如何に唐から遠かつたかは、卷一通典八〇安東府の條に「東至越喜部落二千五百里、……北至渤海一千九百五十里……」とあるのでも明かである。

なほ問題は右に掲げた如く、遼代の五國部では越里吉と鐵驪とが往々混同されてゐたことである。この故に白鳥博士はこれを同一地と考へ、滿洲語では頭を *tole* といひ、ゴルド語では指導者 *el* をといふから、鐵驪と越里吉とはその對音で、即ち五國の頭城の義であらうとされた。卷一誠に巧みな説明である。博士はこの場合、別に渤海の十五府を深く問題にされなかつたので、さう解釋されたのであるが、渤海の十五府では、鐵利の故地は牡丹江の左岸にあつて六州を領し、越喜の故地は同江の右岸にあつて、懷遠府の九州及び安遠府の四州を領してゐたのであるから、それは決して同一地ではない。たゞ後の斡朶里及び火兒阿の如く、牡丹江を夾んで兩々相對峙して、各々別地を領してゐたのである。

渤海傳によれば、越喜の故地なる懷遠府は達・越・懷・紀・富・美・福・邪・芝の九州を領したといひ、金氏の研究によれば、その達州は懷福・豹山・乳水の三縣を有し、富州は富壽・優富の二縣を有し、美縣は山河・黒川・麓川の三縣を有

してゐたらうといふ⁽⁷³⁾。その他のことは解らないが、越喜はかくの如き大國であつたから、その併合以前、渤海はこれを北隣と考へてゐたのであらう。だから舊唐書の渤海靺鞨傳に境界を示して、「南與新羅相接、越憲靺鞨、云々」とある越憲靺鞨の上の脱字は、冊府元龜に「西接」とあるのは明かに誤植で、實は「北接」とあるべきであつたのであらう。

同じく越喜の故地なる安遠府は寧・鄆・慕・常の四州を領したといふ。その慕州に慕化・崇平の二縣があつたといふ外は一切解らない。しかしこの府が懷遠府に連つてその東北にあり、北は黒水靺鞨と相接してゐたことは十分に想察出来る。

なほ思ふに、唐書に所謂北邊の諸部の中、かくして拂涅も鐵利も越喜も皆その所在を知ることを得たが、獨り虞婁だけは湮滅して現はれない。この故に金毓紱氏は前述の海北諸部の挹婁の故地を必ず虞婁の故地の譌と考へ、さう解釋されたが、これはさうではあるまい。虞婁の名は昔勿吉の盛時その傍の小國として魏書勿吉傳に表はれた庫婁國と恐らく同じであらうが、さりとて勿吉の附近にあつたのではなく、遠く後の安遠府の邊にあつたのではあるまいか。さういふわけは、冊府元龜を見ると、開元・天寶以來、北邊の諸國が悉く渤海に併されて、獨立の朝貢をやめた後數十年にして、德宗の貞元十八年(802)正月に突如として虞婁・越喜二國の首領の朝見したことを傳へてゐる。これは誠に希有のことであるが、それはどうしても、この時渤海からは最も遠い虞婁及び越喜の一部がまだ纔に生存を維持してゐたことを示すものと考へなければならぬ。さう考へれば、越喜が今の三姓とすれば、虞婁はその先きの松花江下流域と考へざるを得ないではないか。勿論そこは黒水靺鞨との接壤地帯で、この剽悍なる鄰部の侵入を受け容かつたから、虞婁はやがて黒水靺鞨に擊滅された。その後へ渤海が手を伸ばして、これを併呑したので、渤海は越喜の故地に懷遠府を設けると共に、その前方に更に安遠府を置いたのではあるまいか。それは勿論確證なき憶測ではあるが、私はさう考へて、迹なく消えた虞婁の故地を、松花江の最下流域、渤海の安遠府の邊と推定するのである。

一四

さてかう考へて來ると、渤海の十五府は凡べて地理的順序を追つて整然と述べられて居り、その決して偶然でないことが能く解る。恐らくこれは唐人の恣意による整理ではなく、渤海自身の地理書類に述べられてゐたものをそのまま轉載した結果であらう。その中、龍泉府から鄭頡府に至るまでの八府は第一段で、恐らくこれが渤海の本土に當り、次ぎの定理・安邊・率賓の三府は所謂海北諸部で、宣王大仁秀の時の新收地に當り、記述の第二段である。最後に第三段は拂涅から安遠に至る四府で、これらは北邊の屬領である。だからその範圍は割合廣漠で、多くの州縣を包含してゐたのであらう。その中、契丹に滅ばされた拂涅と恐らく黒水に蹂躪されたらしい虞婁とは後に聞えなくなつたが、半屬の鐵利と越喜とは渤海の滅亡と共に直に契丹に通じ、その後永く遼代に知られたのである。

前に述べた通り、唐の開元の初め渤海では武王大武藝の時既に黒水を伐ち、恐らくその結果として鐵利などは間もなく渤海に屈從したが、他の北邊諸部はそれらの唐への朝貢が聞えなくなる時、即ち開元の末天寶の初め頃に漸く渤海に従つたのであらう。渤海でいへば、文王大欽茂の時で、渤海は是に至つて都を北方の上京に遷した。なほ渤海傳によれば、唐は肅宗の寶應元年即ち文王の大興二十六年(823)に至り、初めて從來は渤海郡王だつたものを、上せて渤海國王にしたといふが、これは正に右の國勢の振張を認めたからではあるまいか。

一五

なほ渤海傳には

又郢銅涑三州爲獨奏州。涑州以其近涑沫江、蓋所謂粟沫水也。

とあるが、獨奏州とは後の直隸州で、府に屬せず、中央に直隸したもので、涑沫江とは粟末水即ち今の松花江の渤海名であらう。涑州はその松花江に近いといふから、契丹道の扶餘の後衛で、今の吉林の北、烏拉街の邊にでもあつたのに相違ない。烏拉街の北の烏拉城址は、明末の海西女直、所謂呼倫四部の隨一であつた烏拉部の據つた所で、その古城址は復郭を有し、頗る複雑になつてゐるが、當時の城址は、葉赫でも哈達でも輝發でも、もしくは建州諸部の城でも悉く山城であるのに、ここだけは獨り平地の平城になつてゐる。これは或は渤海の涑州の迹に據つたためではなからうか。

銅州については、遼史^{卷三}地理志咸州の條下に

渤海置銅山郡、地在漢候城縣北、渤海龍泉府南、地多山險、寇盜以爲淵藪、……

と見えるが、遼金時代の咸州は今の開原であつて、かやうな地勢とは相合はないから、これは渤海時代のことを言つたものに相違なく、金毓紱氏も疑つてゐる如く、銅山郡即ち渤海の銅州でなければならぬ。さうとすれば、問題の銅州は上京龍泉府の南方で、中京顯德府の北に當り、兩京を繋ぐ境上の險隘にでもあつたのではなからうか。郢州のことは全く解らないが、涑・銅二獨奏州を右の如く解すれば、残りの一獨奏州なる郢州も、また北方の強藩鐵利・越喜を上京に結ぶ大道上の要衝で、今の寧古塔の北方あたりにでもあつたのであらう。

も少し遺漏を拾へば、渤海傳には五京十五府六十二州とあるけれども、實際渤海傳に掲げられた州名は五十七州だけで、三獨奏州を加へても丁度六十州にしかならない。他の二州は誤脱である。されば金毓紱氏は苦心して遼史地理志より探求し、集州及び麓州を以つて之に當て、なほ賓州もまた渤海の州ではないかと疑つてゐる。しかし麓州や賓州のことは必ずしも明確でない。遼史太祖本紀によると、太祖が渤海の忽汗城を平けた後、歸つて扶餘城に到る間に慎州に次してゐる。或

はこの慎州が渤海の一州であつたかも知れぬ。舊唐書

卷三

地理志によると、「慎州、武德初置、隸營州、領涑沫靺鞨烏素固部

落。萬歲通天二年、移於淄青州安置。神龍初復舊、隸幽州。天寶領縣一、戶二百五十、口九百八十四」とあり、これと關係

ありけであるが、確かでない。さて金氏の考定によれば、集州は奉集一縣を領し、麓州は麓郡・麓波・雲川の三縣を領した

といふが、いづれにしても、それらが何府に屬したかも明かでなく、隨つて今の何地にあつたかも、到底知ることとは出來ぬ。

なほ續日本紀

卷一

によると、聖武天皇の天平十一年に來た渤海の使節は若忽州都督胥要德と名乗つたといひ、同じく淳仁

天皇の天平寶字三年に來た使節は木底州刺史楊承慶と號し、翌年の使者は玄菟州刺史高南申と稱したといふ。若忽州の名は

他に所見がなく、不明であるが、木底州及び玄菟州はもし渤海が正しく高句麗の故地名を襲つてゐたものとすれば、いづれ

も今の渾河畔にあつた地名である。若忽州がもし哥忽州の譌ならば、それもまた渾河の上流地方にあつたやうである。しか

しこれらの州名は所謂六十二州の中には入つてゐない。金毓紱氏はこれを渤海が後に州名を改定したために起つたものと考

へ、これら諸州を舊州として錄してゐる。しかし果してさうであらうか。

これは渤海の西境如何の問題であるが、賈耽の道里記による限り、鴨綠江の流れに沿ふ朝貢道では蒲石河を限りとして、

その以東のみが渤海領であり、輝發河から渾河に沿ふ營州道でも新城即ち撫順までが唐領であり、長嶺府即ち北山城子から

が渤海領なるが如くである。その境界は恐らく輝發河・渾河の分水嶺の附近であつたのであらう。かう考へれば、渾河の上

流の玄菟州・木底州や哥忽州は大體渤海の版圖以外のやうである。賈耽は貞元の宰相であるから、道里記の記述も恐らくそ

の頃の實情であらう。これに對して、聖武天皇の天平十一年は唐の玄宗の開元二十七年即ち渤海の文王の大興三年(736)で

あり、淳仁天皇の天平寶字三、四年は唐の肅宗の乾元・上元の際即ち文王の大興二十三、四年(753-56)とある。

これより先き、武后の萬歲通天中(696)契丹が背叛して營州を陥れるや、唐は營州都督府を幽州界内の漁陽に移し、やが

て安東都護府をもそこに寄治せしめて、遼東方面は棄てゝ顧みざるに至つた。渤海が興つたのはこのためである。然るに玄宗が起つて國威を更張すると、開元五年(717)營州を復置し、また安東都護府をも復設したやうである。⁽⁸¹⁾前に言つた開元十三年安東都護薛泰が請うて黑水都督府を設けた如きはその一證である。唐がこの後平盧節度使をして兼ねしめた官稱を専ら「兩蕃渤海黑水四府經略使」といつたが、その兩蕃とは奚(饒樂都督府)・契丹(松漠都督府)を指し、渤海は忽汗州都督府の義であるから、唐は黑水府を奚・契丹・渤海と同等に見てゐたのである。なほ新唐書^{卷四}地理志の末に附した安東都督府隸下の靺鞨州の九都督府十四州の中には、哥勿州都督府・越喜州都督府及び木底州・識利州・拂涅州等の名も見える。尤もその間には新城州(撫順)都督府・遼城州(遼陽)都督府・建安州(蓋平?)都督府及び蓋牟州(奉天の東)・安市州(海城の東南)等の名も見えてゐるから、この時既に唐が遼東の實際的經營を放棄してゐたことは確かであるが、それにしても、同時に哥勿・越喜・木底・識利(即ち鐵利?)・拂涅等の地をもその靺鞨州として主張してゐるのである。これはその旺盛な政策から見て、やはり開元・天寶の盛時のことであらう。さうしてこれらの地方が唐・渤海の係争地帯になつてゐたことはほぼ推察される。然るに、その後安史の大亂に逢ふと、唐は自ら守るに足らず、渤海にまで援兵を求めたといふから、⁽⁸²⁾當然その係争をやめ、遂に肅宗即位の至德(756-7)以後には安東都護府まで廢棄してしまつた。

一方渤海の武王は頗る強氣で、開元二十年(732)には兵を出して唐の登州を侵し、その刺史韋俊を殺したといふ程であるから、その頃から安史の亂中(755-763)までには、哥勿・木底・玄菟等の地は或は皆渤海の勢力範圍に歸してゐたのであらう。だから次代の文王の初世當時には若勿州都督や木底州刺史・玄菟州刺史などいふものがあつて、日本への遣使にまで充てられたのである。

唐代中葉以後の遼東の情況は史料が闕けて詳に知り難いから、何とも言へないが、憶測すれば、安史の亂の收まつた後は、

大唐の威力は流石にまた遼東に加はつて來たのであらう。少くとも遼東に安置された高句麗の餘類は憲宗の元和の頃(806-20)まで存したといふ⁽⁸²⁾。さればその後、北邊の經略や東方の所謂海北地帯の收撫に忙しかつた渤海は、この勞多くして功少き煩擾なる遼東の經營をやめて、意を専らにしてその東北方の經營に努めたのであらう。その結果として、哥勿・木底・玄菟諸州は棄てられ、賈耽の道里記に傳ふる如き境界になつたのではあるまいか。即ちこの遼東の要地、遼河の下流域地方は、その後、唐一代の間、渤海・唐・契丹三者の間の緩衝地帯として放棄せられてゐたのであらう。

一六

最後に渤海の京府州道であるが、五京の制が高句麗の五部の制を承けながら、唐の五都に倣つたことは言ふまでもなく、府の長官を都督といひ、州の長官を刺史といつたことも唐制と同様なこと、上掲の諸例で明かな通りである。我が類聚國史⁽⁸³⁾卷一によると、桓武天皇の延暦十五年、在唐の學問僧、永忠の上つた報告には、渤海のことを述べて、

其國延袤二千里、無州縣館驛、處々有村里、皆靺鞨部落。其百姓者、靺鞨多、土人少、皆以土人爲村長、大村曰都督、次曰刺史、其下百姓皆曰首領。土地極寒、不宜水田。俗頗知書。

とある。延暦十五年は唐の德宗の貞元十二年で、渤海では文王の次々代の康王の正暦二年(796)であるから、この最盛時の渤海を言つて、「無州縣館驛、處々有村落」といつたのは、明かに盛唐の繁榮に眩惑したもの言ひ過ぎであらうが、その土人と靺鞨との關係の如きは大いに參考とすべく、土人とは大日本史も認むる如く、明かに高句麗系の人を指す。さうして府に都督があり、州に刺史があつたことは疑ひがない。その日本道・新羅道・朝貢道・營州道・契丹道等の如きも夫餘の四出道を想起せしめるものである⁽⁸³⁾。

渤海人が一般に漢字漢文を容れ、それで事を足してゐたことは、右の王號年號や府州縣の名義等からも疑ないが、新唐書の渤海傳によると、武王の拓境を言つて「斥大土宇」といひ、宣王のそれを「開大境宇」といつてゐる。これらは高句麗の好太王の「廣開土境」を想起せしめるもので、渤海一流の表現であるべく、少くとも、唐の粟末水を渤海では「涑沫江」と書いてゐたことは上述の如く明記のあるところである。

以上多岐に渉る論旨を成るべく簡略に叙したので、委曲を盡さないところが多いし、黒水靺鞨の後身の問題やその境外の東北諸部などについても、論すべきことは多々あるが、餘りに長篇になるから、ここに一先づ擱筆する。しかし以上によつて、渤海の五京十五府六十二州のこと及び所謂靺鞨七部のことはほぼ決定したと思ふ。若しこれを持して實地踏査を行つたら、嘸かし發明するところも多かるべく、訂正補足されるところも尠くないことと考へるが、今その機會を得ないことを遺憾とする。とも角、滿洲輿地のことを詳述することこの時の如きは稀れであるから、この考定は必ずや他の時代の研究にも相當の基礎を與へるものと思ふ。

昭和二十九年二月廿二日

國際基督教大學研究室に於いて

和田 清

註

1 渤海建國の年を池内博士は聖曆三年とせられたが、(鐵利考、滿鮮史研究中世一、三七頁)、金毓紱氏は日本史料によつて、これを聖曆元年と訂正した(渤海國志長編卷一九、九葉)。

2 従來は渤海は十四代二百餘年と考へられて來たが、金毓紱氏の研究によつて、第十四代瑋瑤が加へられ、十五代となつた(長編卷六)。

さうして末王を哀王といひ、その前代を景王ということの誤なることも明證された(長編一九)。

3 渤海國志長編卷一九、二五葉。

4 新唐書渤海傳の本文には「彝震死、弟虔晃立、死、玄錫立、咸通時三朝獻。初其王數遣諸生詣京師太學、習識古今制度。至是、遂爲海東

盛國。地有五京十五府六十二州、云々」とある。そこで鳥山氏や金氏は五京十五府六十二州を咸通の時(860—863)のことと考へられたが、それは誤解で、實は太和中(827—835)宣王當時のことなることは言ふまでもない。

5 續日本紀卷二二、天平寶字三年條。

6 舊唐書卷三九地理志河北道、新唐書卷三九地理志河北道、卷四三地理志羈縻州。

7 池内博士「渤海の建國者について」(東洋學報五ノ一、滿鮮史研究中世一所收)。

8 津田博士「安東都護府考」(滿鮮地理歷史研究報告一)。

9 和田清「魏の東方經略と扶餘城の問題」(東洋學報三ノ三、二九四—三〇三頁)。

10 鳥山喜一氏「渤海史考」二三三—二四四頁。

11 金毓紱氏「渤海國志長編」卷一四、五葉。

12 津田博士「渤海考」(滿鮮報告一)。

13 鳥山喜一氏「渤海中京考」(考古學雜誌三四ノ一)。

14 松井等氏「渤海國の疆域」(滿洲歷史地理一、四一—四四頁)。

15 齊藤甚兵衛氏「半拉城—渤海の遺蹟調査」昭和十七年十一月琿春縣公署刊。「滿洲國間島省琿春縣半拉城に就いて」(考古學雜誌三二ノ五)。

五)。

16 池内博士「蒲盧毛朶部について」(滿鮮史研究中世二、四二七—八頁)。

17 松井氏「渤海國の疆域」及び津田博士「渤海考」等參照。

18 箭内博士「滿洲に於ける元の疆域」(滿洲歷史地理二、二九六—三二二頁)。

19 松井氏「同上」(滿洲歷史地理一、四一—六頁)。

20 松井氏「滿洲に於ける遼の疆域」(滿洲歷史地理二、四六頁)。

- 21 津田博士「渤海考」(朝鮮報告一、一二八—一三〇頁)。
- 22 和田清「魏の東方經略と扶餘城の問題」。
- 23 池内博士「肅慎考」(朝鮮史研究上世篇、三八九—四三七頁)。
- 24 池内博士「夫餘考」(朝鮮史研究上世篇、四五〇—一頁)。
- 25 金氏「渤海國志長編」卷一四、一〇—一葉。
- 26 27 池内博士「蒲盧毛采部について」(朝鮮史研究中世二)。
- 28 池内博士「刀伊の賊」(朝鮮史研究中世一)。
- 29 池内博士「遼の聖宗の女直征伐」(朝鮮史研究中世一)。
- 30 津田博士「勿吉考」(朝鮮報告一、一〇頁)。
- 31 池内博士「勿吉考」(朝鮮史研究上世篇、五〇六—八頁)。
- 32 日野開三郎氏「靺鞨七部考」(史淵三六、三七合輯號)。
- 33 松井氏「滿洲に於ける遼の疆域」(滿洲歴史地理二、三二—四二頁)。
- 34 池内博士「夫餘考」(朝鮮史研究上世篇、四三九—四六八頁)。
- 35 和田清「魏の東方經略と扶餘城の問題」。
- 36 津田博士「勿吉考」(朝鮮報告一、一五頁)。
- 37 池内博士「勿吉考」(朝鮮史研究上世篇、五一—一頁)。
- 38 池内博士「夫餘考」(朝鮮史研究上世篇、四五—一頁)。
- 39 滿洲歴史地理索引参照。
- 40 鳥居博士「西比利亞から滿蒙へ」六一—六六頁。プルジュリスキイ「ウスリイ地方の旅」一一二—一二四頁。

- 41 和田清「開元・古州及び毛鄰」(北亞細亞學報三)。
- 42 清太祖實錄卷四。
- 43 和田清「支那の記載に現れたる黑龍江下流域の原住民」(東亞學一、東亞史論叢所收)。
- 44 池内博士「曹魏の東方經略」(滿鮮史研究上世篇、二七五—六頁)、津田博士「渤海考」(滿鮮報告一、一三二頁)。
- 45 金氏「渤海國志長編」卷一四、二三—二四葉。
- 46 金氏「渤海國志長編」卷八、屬部表參照。
- 47 松井氏「渤海國の疆域」(滿洲歷史地理一、四二七—四三一頁)、池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世二、二二—二四頁)、同博士「勿吉考」(滿鮮史研究上世篇、四八二—五〇六頁)、日野開三郎氏「靺鞨七部考」(史淵三六、三七合輯號)。
- 48 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、二五—三五頁)。
- 49 池内博士「勿吉考」(滿鮮史研究上世篇、四八五—四九一頁)。
- 50 津田博士「遼の遼東經略」(滿鮮報告三)。
- 51 日野氏「靺鞨七部考」(史淵三六、三七合輯號)。
- 52 箭内博士「滿洲に於ける元の疆域」(滿洲歷史地理二、三七五—三八八頁)。
- 53 白鳥博士「室韋考」(史學雜誌三〇編四號、三六八—三九九頁)。
- 54 鄭曉「吾學編皇明北虜考」。
- 55 白鳥博士「室韋考」(史學雜誌三〇編四號)。
- 56 池内博士「勿吉考」(滿鮮史研究上世篇、一九九—五〇一頁)。
- 57 津田博士「勿吉考」(滿鮮報告一、二九頁)。
- 58 池内博士「勿吉考」(滿鮮史研究上世篇、五〇一—五〇六頁)。

- 60 池内博士「遼代混同江考」(滿鮮史研究中世一、二二四—六頁)。
- 61 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一五一—七七頁)。
- 62 松井氏「渤海國の疆域」(滿洲歷史地理一、四三〇頁)。
- 63 實は通行の唐會要には右の本文の「渤海國顯德府」を「渤海國顯德府」とあるが、南方の中京顯德府では意味が通じないから、今は姑く滿洲源流考所引の唐會要及び太平寰宇記の正しかるべきを思ひ、これに據つた。
- 64 白鳥博士「室韋考」(史學雜誌三〇編四號、三八五頁)。
- 65 和田清「明初の滿洲經略」(滿鮮報告一三)。
- 66 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、三五—四三頁)。
- 67 白鳥博士「室韋考」(史學雜誌三〇編四號、三八六—三八七頁)。
- 68 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一三〇—一六〇頁)。
- 69 松井氏「滿洲に於ける金の疆域」(滿洲歷史地理二、一八八—一九六頁)。
- 70 和田清「元代蒙古の封禁について」(史潮六ノ二、東亞史論叢所收)。
- 71 和田清「明初の滿洲經略」(滿鮮報告一四、二三八—二四六頁)。
- 72 白鳥博士「室韋考」(史學雜誌三〇編四號、三八九—三九〇頁)。
- 73 金氏「渤海國志長編」卷一四、三一—三三葉。
- 74 75 同上、卷一二、二葉、卷一四、二二—二四葉。
- 77 同上、卷一四、三五葉。
- 78 同上、四三—四四葉。
- 79 津田博士「安東都護府考」(滿鮮報告一)。

80 日本紀略前篇一一、續日本紀卷二一、天平寶字二年條。

81 新唐書卷三九地理志河北道。

82 同上、津田博士「遼の遼東經略」(滿鮮報告三)參照。なほ日野開三郎氏に「小高句麗國の研究」といふ大作があり、専らこの問題を取扱つてゐるといふから、それを見たら參考になるところが多からうと思ふが、本篇の成る頃はまだ發表されてゐなかつた。

83 三國志魏志卷三〇夫餘傳には「國有君王、皆以六畜名官、有馬加牛加豬加狗加……、諸加別主四出道、云々」とある。

(東京大學名譽教授、東洋文庫研究部長)